東方洪水域

葬炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方洪水域

【Ｎコード】
Ｎ２５４３Ｙ

【作者名】
葬炎

【あらすじ】
「あ～、暇だ～」と、ぶらぶらしていたら”じゃあちょっとこっちにこい”「えっ」と呼ばれて気づいたら何もない空間だった・・・。ようするにテンプレで東方の世界に逝きます☆「☆じゃねーよ！あんな世界じゃ３秒で死んじゃうわっ！！」・・・がんばって♪ということで一般の高校生が東方にｉｎ！

自己紹介及び主人公設定

どうもっ！葬炎です！
今回初めて小説を書き始めました。まだまだわからないことも多く、ぐたぐたな展開が多々あります。なので、ここの部分をこういうふうにしたらいいよ！とか、このキャラはこういうふうにして！などは言ってくれると嬉しいです！では主人公設定です！

名前：千夜

性別：男

年齢：１７（不老不死になったため容姿が１７で止まっている）

能力：水を司る程度の能力

容姿：普通よりちょっと上？でもやっぱりモブ

備考：前の世界ではどこまでも普通な学生だった。普通の家で普通に暮らし成績は下の中くらい（ようするにバカ）。ゲームや漫画の知識はちょっとはあるがオタクほどでは無い。将来の職業について悩んでいたが、東方の世界にきてしまったため関係無くなった。

ついでに神の設定

名前：吾輩は神である、名前はまだ無い（もう出番無し）。

年齢：んなもん数えてられっか！

性別：自由、精神は男

能力：東方風に言うと、創造と破壊を司る程度の能力

容姿：イケメン、１０００人中１０００人が振り返るくらい。・・・イケメン爆発しろ（ぼそっ）肉体の年齢は２０くらい

備考：あらゆる平行世界を管理する神、でもある日あまりの仕事の量にぶち切れてそれぞれの世界に意識、いわゆる『世界意思』と呼ばれるものを創り自分で自分を管理するようにした。その結果暇になり今ではゲーム三昧。主人公が転生した理由は、やっとモンスター・〇ンターと呼ばれるゲームのミラ〇ルカンと呼ばれる（作者的に）最強のモンスターを初期装備で倒せたことに喜び、ちらっと世界を見たときたまたま目に入った主人公が「暇だ～」と言っていたためその願いを叶えてやった。（ハイテンションなときだったので、まさにやっちゃった☆彡って感じ）

２０１１　１１／７　全話編集　作者は削除されました

魔王（神）からは逃げられない！（前書き）

処女作です！
誤字脱字は教えてくださると嬉しいです。
駄文です。

魔王（神）からは逃げられない！

「あ～、暇だ～」

と、だれてるバカが一匹

「バカっていうなーー！！」

だってバカじゃんｗ

「あーーっもう！！」

暇な主人公はあまりにも暇なために友達が存在しない街を歩いていた。

「家に帰っても勉強しろって言われるだけだしなー、帰りたく無いなー」

”じゃあちょっとこっちにこい”

「えっ誰？どこｄ（って何この光の玉は！元気〇っぽいな！こっちくんな！！」ｰダッｰ

主人公は声の主を探していると光の玉が自分の方に向かってきてたためとりあえず逃げ出した

”逃げんなっ！”

「無理っ！ちょっこっちくんなって！」

”はっはっはーー！俺（神）から逃げられるとでも思ったかーー！！”ｰブゥンｰ

「えっ早くなったし！逃げ切れなｰうぼあーーー！！」

主人公は光の玉に飲み込まれた・・・

しゅじんこうはめのまえがまっしろになった！

ここは誰？私はどこ？（前書き）

感想をもらえると泣いてよろこびます！

ここは誰？私はどこ？

ここは何も存在しない空間

「いったいなんだったんだあの玉は」

”ようやく気がついたか”

声の主をみると見慣れない人間がっ！

「あんた誰？」

”ふん、聞いて驚ｋ「まあ誰でもいいけど、ここはどこ？」俺の話を聞けっ！”

・・・だが主人公にはどうでもいいようだ

「じゃあ聞いてやんよ。」

”（なんで上から目線なんだ？）まあいい、俺は神だっ！！”

「あっそ」

”あれ？”

神は期待していた反応と違ってて混乱している

「で、俺はどうなんの？」

”いやいやいや！反応薄いな！”

「だって信じて無いし、正直誰でもいいし」

”いや本当に神だからっ！”

「ふーん、で？俺はどうなんの？」

何も無い空間より、いきなり現れた神（？）より自分がどうなるのかが心配なようだ

”（もういいやｏｒｚ）お前に転生をしてもらう”

「わかった～」

”（・・・もう突っ込まんぞ）じゃあ逝ってこい！”

「‘パカッ‘あ～、穴があくとかありきたりすぎだろｗちょっとはひねろーぜｗ」‘ヒューン‘

”・・・ちょっと調子がくるったな、まあもう会うことは無いだろう”

神と主人公の会話はこれにて終了。しかし神は再会フラグがたっているのに気づいていなかった！！

”あ・・・どこの世界か言ってねえや、まあなんとかなんだろ、じゃあお詫びになんか適当に能力つけといてやるか”

・・・主人公はどうなんのやら、それは誰にもわからない。

”・・・隣で「転生したいっ！」って叫んでたオタクならもっといい反応してくれるかな？”

ここは誰？私はどこ？（後書き）

そして作者にもわからないｗ
やはり上手く書けない、ランキング上位の作者さんはマジで尊敬します！
この神の再登場はもう無いと思います。
最後のはフラグではありません

気がつけば森の中（前書き）

駄文！そしてぐたぐたｗ

気がつけば森の中

ギャー・・・ギャー・・・

今主人公が居るのはそこそこ危険な森の中

「［Ｚｚｚｚ・・・Ｚｚｚｚ・・・］・・・んーー、よく寝たーー！」

どうやら主人公は寝ていたようだ

「あれ？さっきまでいたうざいくらいのイケメンは？」

・・・神はイケメンだったらしい

「なんか話してたけど眠くてほとんど聞き流してたしなー」

神の話をスルーしてたのは寝たくて話をぱぱっと終わらそうとしたからみたいだ

「ふあ～、ってここどこよ？」

「なんか話をちゃんと聞いてたほうがよかったかな？でももうどうしようもないし・ペラッ・ん？紙？」

・これを読んでるということは無事についたようだな、今お前がいるのは東方Ｐｒｏｊｅｋｔというゲームの昔の世界だ・

「はあっ！東方の世界かよ！そんな世界じゃ俺すぐピチュるじゃん

！！」

※主人公はあくまで一般人です

'だがすぐに死んでしまうとつまｒ．．．もといかわいそうなためお前に特典を与える'

「今つまらないって言おうとしたな？．．．まあいい、それならなんとかなるかな？」

'１つ目はお前が死のうと思わないかぎり死なない不老不死'

「うあｗ最初からすごいのがでたなｗ」

'２つ目はお前に合う能力'

「おおっ！やっぱり東方といったら能力がないとやってらんないっしょ！」

'これは後で座禅をくむなりなんなりして確かめてくれ、俺が決めたわけじゃないから弱くても俺のせいにすんなよ'

どういうことかというと、主人公が深層心理で'こうなりたい'と願ったことを能力にしたそうだ。

「マジかｏｒｚじゃあつかえない能力の可能性もあんのかよ」

'３つ目は妖怪化だな、種族は無くて特徴も一切無い'

「んだとゴルァッ！じゃあ人外になっただけで意味ねえじゃねえか

！」

'だがお前は不老不死だからな、生きていればそれだけで強くなれるからたとえ能力が弱くても最強にはなれるだろ'

「なま言ってすみませんでしたｍ（＿＿）ｍ」

'以上だな、身体能力は妖怪化の影響で全体的に上がっているから注意しろ。'

「ありがとう神様っ！今までの無礼をお許し下さい！！」

'なお、この手紙は読み終わったら爆発します'

「え'チュドーン！'あの駄神がっ！今度会ったらぶち殺す！！」

～あの空間～

”（ブルッ）うおっ！いきなりなんだ！まあいい、もうやること終わったしまたモン○ンでもすっか♪”

～再び主人公～

「ん～、せっかく別の世界に来たんだし名前を変えよっと、何がいっかな？」

親に貰った名前を変えるとは、

「ん～、あっ！じゃあ千夜＞せんや＜な！」

「名前が決まったけどこれからどうなんだろ？」

ギャー・・・ギャー・・・

現在地：なんか危険そうな森

「・・・もしかして俺オワタ？」

気がつけば森の中（後書き）

中途半端

やせいのライオンがあらわれた！（前書き）

連投はしばらくしたらなくなります

やせいのライオンがあらわれた！

「どうも主人公の千夜です。誰か俺を助けて下さい」

「あーー！結局ここはどこなんだよっ！」

神はてきとーに落としたようだ

「本当にあの駄神覚えてろよっ！」

「どうすんだよ、俺サバイバルなんてしたことねーぞ！」

「もうやだ俺生き残れる気がしないｏｒｚ」

強く生きるんだー（棒読み）

「は～、落ち込んでてもしょうがないし、とりあえず能力の確認でもするか」

「・・・さーてと、座禅から始めるか？」

～1時間後～

「（（（　＿　＿　））））・・・ｚｚｚＺＺ」

寝るなよっ！

～さらに1時間後～

「いやっ！はあっ！」

千夜はなにやら拳法らしき動きをしている

「・・・太極拳ってこうだっけ？」

・・・今まで何をしていたのか小一時間問い詰めたい、それに能力を確認するのになぜ太極拳？

「・・・さあ？」

～さらにさらに1時間後～

「ー一飽きた」

千夜はあの後色々試してみたが、思うような結果が出なかったため飽き始めてきた

「まあそうそう他の妖怪に襲われることなんてがさっ」え”っ」

［グルルル］

「・・・！！（Bダッシュ）」

［ガオーーッ！！］

「なんで日本？にライオンがいるんだよっ！」

日本です

「ちくしょーー！なんで不幸なことばっか起きんだよ！」

ちなみに今千夜を襲っているライオン？は妖怪です

「うわーーー！とりあえずこのライオン（？）をどうにかしないとっ！！」

千夜の願いがつうじたのか、走っている先にそこそこ大きい川がある

「うおっ！ラッキ！もどきとはいえしょせん猫科っ！ならば水の中にはこないだろっ！！」

ーただし現実は非常だったー

「うおおおおっ！ダーイブ！！」

- バッシャーン -

「ふう、これでだいｊｙ - バッシャーン - なにっ！？」

［グルルル］

「ギャー！まだ追ってくるーー！」

［ガーーー！！］

「うわっ！食われｒ - ピキーン - 閃いたっ！」

”水を司る程度の能力”

「はあっ！！」

［ぎゃうっ！」

「はっはっはー！我が世の春がキターーー！」

千夜は襲いかかってきたライオンもどきを水でポケ○ンのハイド○ポンプのように水をはきだして撃退した

「はっはっはーー！・・・はあ、落ち着いた。とりあえずこのライオン？は食えるかな？」

と、千夜がライオンもどきに近寄ると

「ん～～あ、いたいた。ってうわあ・・・グロッ、しかもライオンと微妙に違うし」

千夜はライオンもどきの顔を見ると普通のライオンと違うのがわかったようだ

「なんかこのライオン？たぶん妖怪かな？に目が三つあるし、角も生えてるし」

「・・・さすがにこれは・ぐ～～・・・・・・まあ大丈夫かな？いただきます！」・がぶっ・

千夜はあまりに腹が減っていたため生のまま食い始めた

「うえ・・・マズ、でも我慢しよ」

やせいのライオンがあらわれた！（後書き）

どうしたらいい小説が書けるんでしょうかねえ？

俺の旅はこれからだっ！（前書き）

やっと東方キャラとエンカウント

俺の旅はこれからだっ！

「は～、あのライオンもどきがありえないくらいマズかった」

「ん～、どうしよっかな？とりあえず危ないから森から出よう」

「川に流されて行けば下流につくだろ、そして人を探す」

あきらかにバカな発想をした千夜

「ん？なんか悪口を言われたような？」

気のせいだ

「気のせいか」

「よし！じゃあこのままＧＯ！」

そんな感じで千夜は川に入ったまま流されていったとさ

「まあ妖怪だし風邪とかにはならんだろ」

流されてしばらくすると

「は～、快適♪かいｔ・ゴスンッ！・痛ってーー！」

・ガスンッ！・・ゴスン！・・ガブッ！・

「ぐはっ！ごはっ！うぎゃあーー！」

千夜は期待どうりになったようで、頭に岩がぶつかって、そのまま次の横にあった岩にぶつかり、最後に魚に食われかけたようだ。襲いかかってきた大きい魚は水の圧力を使って潰した。ちなみにバカは下流の方に頭を向けて流れていました

「・・・川から出て普通に歩こ」

「は～、前途多難だ…ぐきっ…痛てーー！」

石に足の小指をぶつけてしまったようだ

「俺に救いは無いのかｏｒｚ」

いつかむくわれる日がくると信じたい

「・・・とりあえず森を抜けよう」

～1時間後～

「うわ～！！今度は狼かよっ！」…ダダダダッ…

川沿いを歩いてたら水を飲んでた狼に遭遇

「ちくしょうっ！ならばまた水でっ！」

ーーしかしＭＰがたらなかったため水を操れなかったーー

「ＭＰってなんだよっ！東方にその概念は存在しねえだろっ！」

［がうがうっ！］‐タタタタッ、トンッ！‐

「えっ？［ガブっ］うわ～！」

～また1時間後～

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

どうやらなんとか逃げ切れたようだ

「は～、川から離れちゃったしどうしよっかな～」

「は～［かさっ］だれだっ！」

「そういうあなたこそ誰？」

音がした方を見ると変な格好をした美人がいた

「俺？俺は［ビュン！］うおっ！危ねえな！なにすんだよっ！」

「誰でもいいわ。完全に人型の妖怪なんて初めて見たから、私の薬の実験台になって？」

「いや怖いよっ！どんな薬を投与する気だよっ！」

「え？う～ん、妖怪にどんな影響があるかの実験とか、後は妖怪にどんな攻撃が一番有効なのかとか．．．色々よ」

薬だけではなく人体（妖体？）実験をするつもりらしい

「絶対に嫌だっ！」ｰ ダッｰ

「あなたに拒否権なんて無いわよ？」ｰ タッｰ

「俺の人権はどこに行った！」

「あら？あなた妖怪じゃない」

「ですよねーー！」

「それより逃げないでくれるかしら？」ｰ ひゅんっｰ

「ｰ ビュオッｰ うおっ！なんでそんなに初速と到着時の速度が違うんだよっ！」

「便利でしょ？この弓も発明品なのよ」ｰ ひゅんひゅんひゅん！！ｰ

「ｰ ビュンｰ うおっ！ｰ ビュンｰ はっ！ｰ ビュンｰ こなくそっ！」

「中々粘るわね」ｰ ひゅんｰ

「ｰ ビュンｰ ほいっ！と、そんなにしつこいと何万年たってもお嫁に行けないぞっ！」

「（ビキッ）・・・本気で殺るわ」ｰ ドドドドド！！ｰ

「えっ？ちょ、音がもう弓じゃｎ（ ピチューン ）

「安心しなさい、捕獲用の弓だから死にはしないわ、本気で殺ったから死ぬ程痛いと思うけど」

「妖怪があ・・・弓を持った妖怪がこっちにくる・・・」

「（ビキビキッ）・・・妖怪はあなたでしょ」ｰドドドドド！！ｰ

「ｰダダダダンｰあがががががが！！」

謎の女性・・・おそらく永琳は血も涙も無いのか、倒れている千夜に矢を放ち続けていた

「殺すわよ？」

ひいっ［ガタガタガタ］

「まあいいわ、とりあえずこいつを都市に連れて行きましょう」

「・・・。（返事が無い、ただの屍のようだ。）

千夜は連れて行かれてしまった、生きて都市から脱出できるのでしょうか？それは神にもわからない

「さて・・・どんな薬を使おうかしら？前に作った拷問用の薬？いや先に胃に着くと爆発する薬？・・・まあ妖怪なんだからそこらへんの人間よりはもつでしょう（黒笑）」

・・・［ガタガタガタ］

俺の旅はこれからだっ！（後書き）

それじゃあまた次回ー

えっ？永琳？（前書き）

キャラ崩壊、どうしてこうなったw作者はヤンデレが好きなのでちょっとそっちに行きます

えっ？永琳？

・・・・ウイーン・・ガシャーンガシャーン・・・ギュルルルル・・

「ん～、ここは？」

「あら？気がついちゃった？」

「お前は！」

「ええさっｋ「・・・誰？」・・・あら？脳をいじりすぎたかしら？」

「・・・ああっ！あの妖ｋ「殺すわよ？」しいませんｍ（＿＿）ｍ」

「それよりここはどこなんだよっ！お前は何者なんだよっ！俺をどうｓ「うるさいからまだ眠ってて」えっ－ドスッ－ま・・・またか」

－ガクッ－

「♪～、次はどこをいじろうかしら♪」

「・・・・・・。」

～3時間後～

「・・・・・！！－ガバッ－はあ・・・はあ・・・あの変な格好の美人に改造される夢を見た」

「あら?美人だなんて嬉しいこと言ってくれるじゃない。でも”変な”は余計なお世話だわ」

「・・・!出たなショッ○ー!!」

「誰が世界征服を企む国際的秘密組織よ」ｂｙ　ｗｉｋｉ

「・・・なんでお前が知ってんだよ!」

「さあ?なんかこう言えって電波が届いたわ」

どうやら永琳は電波少女・・・いや年齢的に電波バｂ「なにかしら?」・・・いいえナンデモナイデス

「・・・で?結局俺の体に何したんだ?」

「そうね・・・簡単に言ってしまえば妖怪の弱点を探したり、妖怪を完全に消滅させる方法を探したり、後あなたの体の構造が人間と同じなのが解ったからそれを利用して人体に対する薬の影響を調べたり・・・後は」

「いやいや!もういいから!」

「そう?それとあなたはこれから私の家に住んでもらうから」

「はあっ?なんでだよっ!」

「だって実験が終わって処分しようとしても死なないし、どうしようも無いんですもん。・・・それと薬のいい実験台になりそうですしね（　ぼそっ）」

どうやら永琳は千夜を（丈夫な実験台として）気に入ったようだ

「おいまてゴルア！！今最後の言葉聞こえたぞっ！絶対そっちがメインの理由だろ！！」

「メイン？私には言葉の意味が分からないわ」

「いや絶対分からなくとも理解してるだろっ！」

「それじゃ私の家に案内するわ」

「俺の話聞けや～！」

「こっちよ」

「うが～～！っはあ～もういいや、・・・今のうちに逃げ' ザザッ' ・・・（冷や汗ダラダラ）」

なにが起こったかわからない人に説明しよう！今千夜が解剖室らしきところから永琳が出ていった扉が直接外に出たためそのまま逃げようとしたら、今から戦争に行きます！と言わんばかりの装備をした人？に囲まれたのであった

「そいつらは機械よ」

「いやそれでも怖いよ！」

「それであなたの名前は？」

「（スルー！？）・・・俺の名前は千夜だ」

「そう、私はＸＸＸＸよ」

「はあ？えーと？」

しっかり聞き取れたはずなのに言葉として理解ができなかったことに混乱しているようだ

「・・・あなたの頭じゃ理解できないと思うから永琳、八意永琳でいいわ」

「俺がバカだって言いたいのか！」

「・・・いいえ？ちがうけど、よく言われるのかしら？」

「・・・はっはっはー！そうだよな、さすがに初対面の人にバカって言われるはずがーーっておい！その生暖かい目をやめろっ！」

「・・・（ちょっとは優しくしてあげようかしら？）」

「ちくしょう・・・ｰぐすっｰ俺だってな・・・ｰぐすっｰ俺だってがんばってんだぞーー！。・（ノД､）・。ｰうわーん！ｰ」

※千夜はガラスのハートなようです

「・・・そう、がんばったのね」（微笑）

永琳はまるで聖母のような眼差しで千夜を見ている

「うあう・・・泣かされた相手に慰められた・・・ｏｒｚ」

「さ・・・家に行きましょうか」

「なんか最初に比べてだいぶ優しくなったような気がする・ぐすん・」

「（泣いてる顔・・・ちょっといいかも）」

「（ぶるっ）うおう！なんかとてつもなく変態・・・もとい大変なことになってる気が・・・」

「・・・（じゅるり）」

「（ぶるぶる）？なんか本能が逃げろと言ってる気がす「気のせいよ」おおう？いきなりなんぞや？」

「あまり痛い実験とかはしないから安心してこっちにきなさい」

「（ビクッ！）？まあそれなら（なんか行ったら引き返せない気が）」

「（ニヤリ）ええ早くこっちにキテ？」

「？ああ（ガシッ）・・・あれ？八意さ「永琳でいいわ」・・・じゃあ永琳さ「さんはいらない」・・・永琳？このがっしりと掴んでる手をどかしてくんない？痛いんだけど」

「・・・ふふふふふ」

「・・・あれ？永琳？目が逝っちゃってるんだけど？めっちゃ怖いんだけど！」

「・・・・ふう、安心して」

「（賢者モード！？）・・・なにに安心しろと？」

「これからあなたにどこに居てもわかるように発信機とか何してるかわかるように盗聴器とかほかにも色々と貴方を改造するだけだから」

「え！？ちょっ俺のプライバシーは！？」

「・・・ふふふ、これから私の家で色々しようねー♪」

「俺の貞操の危機！いや相手が美人だからむしろバッチコイ？・・・でもやっぱ無理矢理はいやーー！！」

「無理矢理はしないわ」

「え？ほんと？」

「ええ・・・まずは貴方を私がいないと生きていけないようにして骨の髄まで私のことを記憶させてから自分から襲うような場面を作ってそれからそれから」

「怖ーー！えっ東方の永琳ってこういうキャラだっけ！？」

「・・・・ふふふふふ夢が膨らむわぁ」

「それは夢じゃなくて妄想っていうんだよっ！え？いやまじで俺食われるの！？」

「さあ・・・一緒にどこまでも行きマショウ」

「いーーーやーーー！！」

それ以降千夜を見た人はいなかったと言う・・・

えっ？永琳？（後書き）

貞操は無事に守られるかっ！？・・・まあしばらくは童貞の予定です

「過程」は消し飛び「結果」だけが残る！（前書き）

四千字を超えたぜ！

「過程」は消し飛び「結果」だけが残る！

ーーキングクリムゾン！同棲し始めてから何百年か後！ーー

「は～～、マジ疲れた」

これから一人称視点に挑戦してみるぜ！

～ということで千夜視点～

は～～、ん？初めての人は初めまして、主人公の千夜だ。突然だが俺の愚痴を聞いてくれ。あれは３６万年前だったか、いや１万６千年前だったか、え？ネタはいらないって？残念だな、エ○シャダイは好きなのに。まあいい、それよりも永琳と同棲しはじめたころは自分を守るのに必死（誤字にあらず）だったよ。そう・・・あれはあのころに起きた事件？だった・・・・・

～永琳と同棲を始めて次の日～

「せ～んやっ♪」ｰ ガバッｰ

「ｰ ポスンｰ うおっ！いきなりどうした永琳？というか最初と比べてキャラ変わりすぎじゃね？」

永琳は抱きつくのが好きなようなんだが、正直に言うと胸が背中に当たって理性が大ピンチだからやめてほしいんだが

「え～、別にいやじゃないでしょ～♪」

「・・・いやもはやお前誰だよ」

「それとも・・・嫌？（ウルウル）」

「嫌な訳があるはずが無いーー

「（ニヤリ）じゃあいいでしょー♪」

ーーはめられた！」

感想：女は怖い

「・・・ふう、そろそろふざけてないで家でヤルことを教えるわよ？」

「・・・今ヤルの発音が怪しかったんだが？」

具体的には犯るほうで・・・

「気のせいじゃない？」

「（は～～）で？実験台以外になにかあるのか？」

はて？俺はてっきり薬漬けにされて最終的にホルマリンに入れられるんじゃないかと思っていたんだが

「や～ね～～、（今の）私がそんな（もったいない）ことするわけ無いじゃない♪」

「今いやな副音声が聞こえたんだが！？」

「気のせい気のせい♪英語でいったらウッドスピリッツよ？」

「・・・絶対お前永琳に憑依した現代人だろ」

じゃなきゃ今までの反応がおかしいだろ

ー違いますー

「はっ、今久しぶりに神の声が聞こえた気がした！」

「・・・頭大丈夫？」

「やめろっ！俺をそんなに痛い子を見るような目で見るな！」

「私とお医者さんごっこをしましょうね～♪」

「なんか惹かれるものがあるが遠慮をっ！？なんで剥いてるんだよ！」

気付いたら上半身が半裸になってたぜ！

「はあ・・・はあ・・・！」

「怖い怖い目が血走ってるんだけどっ！ちょっ離れろって！」

永琳が顔を赤くしながら目を血走らせて迫ってくるとか、キャラ崩壊が激しいぜ！

「は～い♪脱ぎ脱ぎしましょうね～♪」

「17歳の俺からしたら拷問以外のなにものでもないっ！そしていかげんやめろ！」ｰブンッｰ

「ｰゴスンッｰきゃうっ！なにすんのよっ！まあ落ち着いたわ。・・・いいところだったのに（ぼそっ）」

油断すると知らない内に大人になってそうだな・・・

「・・・はあ、で？俺はなにをすればいいんだ？」

話がずれてるからな、立て直さないと

「そうね・・・あなたは料理とかはできるかしら？」

「？こんなに技術が発達してるんなら自動で料理する機械とかは無いのか？というか自分で料理しないのか？」

言い忘れてたが、今居る場所は永琳が都市（現代から見ても明らかにオーバーテクノロジーな都市、どれくらいかというとド◯えもんが生産されてそうな）と言っていたところの中心部辺りにあるあきらかにほかの家とは雰囲気の違う家の中で、簡単に言ってしまえば周りの家は皆典型的な近未来な家なのに対して、この家は武家屋敷のような物である。・・・永琳の自宅らしい。

「当然あるわよ？でもやっぱり人・・・貴方は妖怪だからわからないかもしれないけど、人が作った物は美味い下手関係なく嬉しい物よ？後、私が作るのはちょっと・・・」

ん？言葉を濁したな

「なんでだ？」

「～～～／／／！料理が下手なのよっ！！」

「うおうっ！そんな叫ばなくとも．．．」

以外だな、永琳は全てに置いて天才だと思ってたんだが

ーまったく、デリカシーってもんが無いなー

「．．．で？俺はある程度は作れるが、そんなに美味しく無いぞ？あくまで一般家庭の味だからな。」

「．．．それでいい。いや、それがいいのよ！」

「．．．聞かないで置く、それでいいならいくらでも作ってやろう」

作るのは嫌いじゃないからな

「本当！？ありがと～～！！」ｰ バッｰ

「うわっ！ｰ ギュッｰ いきなり飛び付いてくんなって！」

「はっ！．．．あううう～～／／／」

永琳の顔が恥ずかしさで赤くなってるな

「（えっなにこのかわいい生物、持ち帰りはおｋですか？）」

「ううう～～！（ボンッ）／／／きゅ～～」

「あ、気絶しちゃった。・・・なんで今まで平気で抱きついてたのに今回は駄目だったんだろ？」

「／／／きゅ～～」

「・・・まあ起きたら聞けばいっか。」

～何時間か後～

「／／／うう～、恥ずかしいところを見せちゃったわね」

「ああそのことなんだが、なんでいままで平気で抱きついてきてたのに今回は駄目だったんだ？」

「／／／それは・・・あの・・・・その・・・笑は無いで聞いてくれる？」

「（ぐおっ！美人の上目遣いはヤバイな；）・・・なんだ？」

「えと・・・正面から抱きしめたら顔が近くて、そしたら急に恥ずかしくなっちゃって／／／」

永琳は予想以上に初心（ウブ）だった

「（ぐはっ！やめてっ！もう理性のＬＰは０よっ！）・・・そういえば毎回後ろから抱きついてたな」

そうなのだ、永琳と出会って一日しか経っていないのに抱きつかれ

た回数は１０を超えていて、全て不意打ちぎみに後ろからされていたのだ。

「えっと、これからもよろしくね？／／／」ｰニコッｰ

「・・・・・ぐはっ！（吐血）」

「きゃー！どうしたの千夜！もしかして昨日の実験のせい！？」

「・・・永琳が可愛いすぎて生きるのが辛い」ｰバタッｰ

美人＋上目遣い＋満面の笑顔＋恥ずかしさが残ってる赤い顔＝最強

「そんな、可愛いだなんて／／／・・・はっ！それより千夜をベッドに運ばないとっ！」

ーそして千夜は次の日まで目覚めなかったとさ。・・・リア充爆発しろ（ぼそっ）ー

～時は今！～

な？なかなか危ない事件だったろ？ほかにも小っちゃい事件が沢山あったな。例えば風呂に入ってる途中に永琳が入ってきたり（確信犯）「普通逆だろっ！」って言ったら「じゃあ私が風呂に入ってたら・・・覗いてくれる？／／／」って感じであえなく撃沈（鼻血で）したぜ！ほかにはこんなこともあったなーーーー

～何年か前～

「お～い永琳！飯ができたぞ～！」

「は～い♪」

「よしっ！じゃあ食うか！」

「「いただきます！」」

「ｰむぐむぐｰあいかわらず普通の飯だな」

「ｰあむあむｰ・・・ええ、でも徐々に美味しくなってきてるわねｰギリギリギリｰ

「・・・すごい悔しそうだな」

「女としてはちょっと思うことがあるのよ・・・」

そうなのか？男な俺には分からないんだぜ

「そんな小っちゃいこと気にすんなって」

「貴方からしたら小っちゃくても私からしたら大きいことなのよ！」

「ん～、じゃあ俺が料理教えてやろうか？」

どうせ家から出れないから暇なんだよな、やることといったらネット、料理、ゲームだからな。（他の家事は機械がやってくれてる）

「本当！？」ｰキラキラｰ

「（めっちゃ楽しみにしとる；）あ・・・ああ」

「やった！これで料理が美味しくなったら千夜にあ～ん（はあと）ってしてみたりほかにも／／／」

「ん？・・・あれ？おーいえーりーん・・・駄目だこりゃ。トリップしてるし戻ってくるまでゲーム（ＤＳ）でもやってっか」

ちなみにカセットはポケ○ンの白だ

～トリップ回復に3時間、そのあと羞恥心で部屋の端っこに2時間の計5時間後～

「よしっ！時間もいい感じだし夕食の下準備を始めようか！」

／／／うう・・・まだちょっと恥ずかしいわ」

「（無視）それじゃあ調理始めよー」

相手してたら時間が無くなっちまう

「は～い」

～千夜のお料理教室！会話のみ～

・言葉の意味を理解しよう

「よしっ！じゃあまずキャベツを千切りにして・・・って永琳なにしてんの！」

「え？だって千に切るんでしょう？」

「そのメジャーらしきものは仕舞いなさいっ！ようするに細く切れってことだよっ！」

「・・・こうかしら？」

「いやいや細すぎだって！これもはや繊維じゃん！どうしたらこういうふうに切れんだよ！」

「・・・料理って難しいわね」

「それほどか！？」

・自分オリジナルの味は慣れてから

「じゃあ次はここに味噌を入れて・・・」

「・・・」

「そんで次はさいの目に切った豆腐をいれます」

「（そ～～）」

「こらっ！」

「（ビクッ）」

「今なにを入れようとしてたのかな？かな？」

「その・・・ねえ？」

「ん?言ってみな?」

「えっと、ここで砂糖（甘み）を入れたら美味しいかな~?と」

「なんでだよ!今作ってんの味噌汁だよ!?」

まあこんな感じでね、まさかここまで料理がだめとは思わなかったよ。これが天才とバカは紙一重ってやつなのかな?

「料理って難しいわ~」

「・・・永琳が発明してる物よりは圧倒的に簡単だと思うよ?」

~そして時は刻みだす!~

まあそれから永琳は今までずっと練習を続けていてね、今ではたまにある失敗作を抜けば普通に美味しいってレベルにはなったよ。後は当然能力の練習もしたよ

~つい最近~

「ほっと!」

「うわ~!すごいすごい!」'ワーワー!”キャーキャー!'

ん?今なにしてるかって?それはだな、プール一杯分くらいの水を空中に浮かべてな、空飛ぶプールって作ってみた!

「いや~本当に最初のころに比べて能力が使いこなせるようになっ

てきたな」

「本当にね～。はあ、快適だわ～♪」・ザブザブ・

ちなみに今は夏でな、この空飛ぶプールは子供に人気なんだ！一日百円でね、落下防止用のネットがあるとこで空飛ぶプールを運営してる。あ！ちょっと前から街に行ったりしてるぜ！以外と人気者なんだ！まあ商店街とかでよく手伝いとかしてるからな、皆妖怪な俺を受け入れてくれたよ。まあ最初は近づいたら逃げられたけどな（遠い目）

「よっし！ここまできたらあの技使えるかな？でもさすがに都市で使うわけにもいかんしな～」

前からやってみたかった技なんだが無駄に範囲が広くて特訓室じゃあ狭いしな、さすがに都市の外に出る許可は無理だったよ

ー後々使う機会があるよー

「うおっ！なんか嫌な予感がするんだが・・・まあそん時はそん時だな！」

「千夜～？そろそろ帰るわよ～？」

おっと、どうやら永琳は俺が考えてる間に帰り支度を終わらせていたようだ

「おっし！家に帰って夕食を作っか！」

まあこんな生活も悪くないか

―だがそんな平穏はすぐに壊れることとなってしまった―

「？今フラグが立ったような気がする」

「過程」は消し飛び「結果」だけが残る！（後書き）

どれくらいの話の長さがいいんでしょうかね？

戦争開始！・・・のちょっと前（前書き）

また短くなってしまいました、すみませんm（＿＿）mなるべく五千字前後にしたいですね

戦争開始！・・・のちょっと前

「ハア・・・ハア・・・ハア！」

いきなりだが俺は今全力で走っている、なぜかって？それはな・・・

「トイレはどこだっ！」

ーーーーーーーーーーーーーーー

ふう～～、ん？ああこんな始まりかたで悪かったね、でももう我慢の限界だったんだ。ついでに言うと今は都市が妖怪に襲撃されているとこなんだ。えっ？その割にはやけに落ち着いてるなだって？・・・ああ、もう俺以外に都市には誰も居ないからな、焦る必要がないんだよ

「第一防衛ライン、突破サレマシタ。都市二イル住民ハタダチ二避難シテ下サイ」-ウーー！ウーー！-

「おお以外と早かったな、永琳に言っといて正解だったぜ」

何を言ったって？それはだな・・・

～回想～

ーただ今食事中ー

「そういえば、後何日かしたら大規模な妖怪の襲撃があるそうよ。予言の能力者が言ってたわ」

「ぶほっ！いきなりだな！・・・そうか、都市は大丈夫なのか？」

予言の能力者というのは「夢で未来を見る程度の能力」という、簡単に言ってしまえば正夢を見る能力なんだがやっぱり夢なため見たことが曖昧でね、いまいち使いにくい能力らしい（本人談）

「それが・・・わからないそうよ」

「そうか・・・」

ならば今しか無いな・・・

「まあ都市の防衛は完璧だから大丈夫でしょう」

「・・・いや、今こそ月に行くべきだな」

「・・・なんでよ！まだ、まだ大丈夫なはずだわ！」

永琳が焦ってる理由は穢れがどーのこーので俺は月に行け無いからな、実はと言うともう月に行くシャトルはできている。永琳がなんとか出発を遅くしてなければすでに別れ離れになっていたはずなんだ。月に行く理由はな、穢れを無くして不老不死になるためとか妖怪の脅威から逃れるためだとか色々言われてるがどれが本当の理由なのかはわからない

「・・・永琳、今回はもう危険だってわかってるだろ？」

そう、襲撃はこれで初めてでは無い。すでに何回かしていて、回数が増えるごとに妖怪の恐怖から新しい妖怪が生まれ、さらに人間が

地球から脱出しようとしているのがわかっているのか日本中から妖怪が集まってきている。恐らく今回の襲撃は耐えられ無いだろう

「・・・それでも！」

「-ポン-永琳、少し落ち着くんだ」

「・・・そうね、落ち着いたわ」

まさか永琳がここまで俺のことを思っていてくれてるとは思わなかったよ

「・・・俺は絶対に死なない不老不死だってわかってるだろ？なら永琳が生きてればまた会えるさ」

「・・・絶対よ」

「ああ・・・」

ちなみに転生者だということは言っていない、べっ別に忘れてた訳じゃ無いんだからねっ！・・・うえ、気持ち悪

「・・・いまさら俺は転生者だ！っていってもな（ぼそっ）」

「ん？なんか言ったかしら？」

「いや、なんでも無い」

「そう？」

さてと、あれ（・・・）の準備をしないとな

「さて、せっかくの大イベントなんだからど派手にいこうか」

「・・・あれをやるつもりね；（妖怪が可哀そうになってきたわ）」

ふふふふふ、こんな事もあろうかと、あろうかと！今まで色々とやってきたのだ！

「やっとあれが解禁になる時がきたか・・・！」

「・・・正直普通に戦っても勝てると思うわよ」

「それではつまらないだろう！俺はつまらないのが大っ嫌いなんだ！」

「・・・なんだかんだ言ってあなたも妖怪なのね」

まあな、長い生に退屈は毒なんだよ

「（・・・はあ、私はあなたと居るだけで満足なのに）」

ー裏話だが、別に千夜が月に行ってもなんの問題も無い。だが、千夜（妖怪）が人気者なのが気に入らない人間や、千夜が妖怪だというだけで気に入らない人間が結託して、適当に理由をつけて地球に残そうとしている。ちなみに永琳はこのことを知っているが、そういう人間は上にも居るためどうしようもなかったー

「やっぱり私も地上に残ろうかしら？」

「それはやめてくれ、俺が恨まれる」

ただでさえ妖怪が都市にいることでお偉いさんに睨まれてるのに

「・・・そうね、再会するのを楽しみにしてるわ」

「おう、そうしといてくれ」

「ええ・・・じゃあシャトルの最終整備に行ってくるわ」

「ああ、行ってこい」

'バタン'・・・行ったか、じゃあ俺も妖怪襲撃のための準備をしようかね

「'ギイ'あまりやりすぎちゃ駄目よ?'バタン'」

・・・俺そんなに信用無いかな?

「・・・まあいっか」

よしっ!じゃああれを出してっと、ふひひひひ

「(・・・すごい心配だわ)」

戦争開始！・・・のちょっと前（後書き）

次回戦争、千夜が準備したものとは！・・・どうしよう？そんなに期待しないで下さい

戦争の始まりだ！（前書き）

俺前に五千字超えたいって言ってたよな？すまんありゃ無理だった。
今回も四千字くらいです。今後もこれくらいの一話の長さになると思います。

戦争の始まりだ！

－ドカーン”バカーン”ズドドドド・・・－

－ワーー！”ギャーー！”ひでぶっ！－

え？今なにしてるの？だって？それはな・・・

「－ダダダダ－ははははは、見ろ！妖怪がゴミのようだ！」

妖怪を殲滅中なんだぜ☆

「－ダダダダ・・・・・プスン－あ？・・・・ああ、水（・　・　・　・）が切れたのか」

そう！俺が準備していたのは大量の水だ！・・・ん？今「なんだ、ただの水かよ」って思った奴居るだろ、水舐めんな！人間が科学で作ったアクアカッターなんて言う汎用性が高すぎるものがあるくらい水はすごいんだぞ！それにこれはただの水では無い、何百年もの間ずっと圧縮しながら妖力を込めつづけた俺特性の水なんだ！

「ひゃっはーー☆」－ザシュッ”ザシュッ－

ようするに水は全て俺の思うままに操れる

「そらっ！水爆弾だ！」－ドカーン－

ちなみに爆発音の正体は圧縮した水の圧縮を解いただけさ。でも圧縮した量が半端ないからそれだけで脅威だぜ

「それっ！」-ズパッ-

今使っているのはまんまアクアカッターだな、違う所と言えば圧縮されてる量がだんちなのと、水は使い捨てじゃ無くて循環している（ノコギリのような物です）のと、さらに操れると言うことだ！

［ガオオオーー！］

「おお、俺の弾幕をかいくぐるとはやるな！」

弾幕の構成：水爆弾（一定の距離を進むと複数の弾に分裂する）水の銃（速度がヤバイ上に一定の距離を進むと大きくなる。連射性が高い）水の剣（不規則に動きながら追尾してくる、軌跡は消えない上に無限に伸びる、そして複数）水レーザー（速度が（ｒｙただし真っ直ぐ、そして長い）この弾幕が視界を埋める量でくる。結果ーーーーー

［グオオオーー・・・・・］

「あらら、せっかくここまでこれたのにねえ」

ーーーーーこれなんて無理ゲ？ｂｙ　妖怪の皆さん

「ちえ～、もうちょっと踏ん張ってくんないかな～」

視界を埋めるほどの死体死体死体死体死体ーー

「お？」

ーーその中で無傷で立っている妖怪がいた

「・・・ちっ、あんだけ居た俺たちがこんな短時間で全滅するとはな」

「そういうお前は、容姿から考えると鬼・・・なのか？」

「ああ・・・」

角を生やし筋肉がムキムキで下は腰蓑だけのーー

「ーー変態だ！」

「ちがうわっ！」

ーーそう、容姿がほとんど人間の男と変わらないためただの変態にしか見えない

「ん？お前よく見てみるとーー」

「・・・なんだ？」（警戒中）

「ーーいい男だな」

「・・・！（明日への逃走）」ｰダッｰ

ガチムチに好かれたくねえよっ！

「おい！なんで逃げ出す！」ｰダッｰ

「俺にそっちの趣味は無い！」

「そっち・・・？ああ！ちげえよ！戦闘相手にちょうどいいって意味だよっ！」

「そうやって俺が油断したところで後ろからズプリと・・・」

「だからしねえって！」

～それから似たような言い争いを一時間ほど～

「「はあ・・・はあ・・・」」

「・・・わかった、理解しよう」

「ようやくか、なんか無駄に疲れちまったぜ」

「それより戦闘を始めようか」

「ああ！楽しみだ！」

「それじゃあ、都市最強の妖怪千夜！押して参る！」

都市には妖怪が俺しか居無いからな、間違えでは無い

「じゃあ俺も、鬼神の剛鬼＞ごうき＜！全てを破壊しようか！」

おお！そのセリフかっこいいな！俺もなんか考えとこ

「「いざ・・・勝負！」」

ーーーーーーーーーーーーーー

「はあああああ！」ー ガキンッ！ガキンッ！ー

「ウオオオオ！」ー ブンッ！ドシン！ー

ちくしょう！なんで当たってるのに水の剣も銃も効かないんだよ！
ついでに剛鬼の攻撃は当たるとやばそうだからがんばって全部避けてる

「ハアッ！」ー ヒュン！ー

「フンッ！」ー パシッー

な！？表面は高速で水が流れてるから触れただけで切れるはずだぞ！

「ソラッ！」ー バキンー

「うおっと！」ー パシャッー

「・・・水か、壊しても再生するし厄介だな」

ちょっ！こんだけ圧縮した水（だいたい水の剣一本で一つの町を沈めることができる）を握り潰すとかどんだけ力が強いんだよ！

「ん？斬れないことに驚いてるな」

「・・・ああ、なんかの能力か？」

「そうだ。なんなら教えてやろうか？」

「本当か！？」

「鬼は嘘をつかん」

・・・そんだけ自分の能力に自信があるってことか

「・・・教えてくれ」

「おう、俺の能力は”干渉を否定する程度の能力”だ」

「・・・なんだそれ、チートじゃねえか」

「まあ自分への干渉しか否定できないがな」

それでも攻撃が効かないってことだろ・・・

「勝てる訳が無い！」

「あーーっはっはっは！なにもこの能力は無敵って訳じゃ無いんだ、当然抜け穴もあるんだからがんばって探すんだな！」

そんなこと言ったって俺はそんなに戦闘のセンス？って言えばいいのかな？があるわけじゃ無いんだから戦闘しながら弱点を理解するなんてできるわけが無いだろ！

「考えるんじゃ無い、感じるんだ！」

「無理！俺は感じるより考えるタイプだ！」

―そしてバカなため考えて空振りすることがほとんど―

「（タイプ？）お前と会ってまだ間もないが、絶対そんな性格では無いと断言しよう」

「なぜだーー！」

おかしい、俺は友達に「お前ってたまにすごい（バカな）発想するよな～」って褒められたことがあんだぞ！・・・あれ？褒められたんだよな？

「それよりお前の能力は？」

「・・・”水を司る程度の能力”だ」

「ほお、お前の能力も凄い能力じゃないか」

「・・・そうか？」

確かに水を操れる（・・・）のは凄いと思うが

「・・・さてはお前、自分の能力を全部理解して無いな？」

「いやそんなはずは無いんだが・・・」

「（やっぱり理解してないな）・・・このままじゃつまらんから少しだけヒントをやろう」

「・・・」

「お前の能力は”水を操る程度の能力”では無く”水を司る程度の能力”なんだぞ？」

「・・・つまりは？」

「（やっぱりバカだなこいつ）・・・水に関係することはなんでもできるんだ、そして全て生物にはとある水が流れている。これは妖怪も例外では無い」

「・・・！血か！」

よしっ！それじゃあさっそく・・・

「・・・そうなんだがな、それじゃあ俺は倒せんぞ？」

「・・・ああ！お前の能力を忘れてた！このチートめ！」

まあいい、俺は死なないんだから弱点がわかるまで納豆のごとく粘ってやる！

「（ぶるり）・・・今果てしなくめんどくさいことになった気がする」

「俺が諦めるまで殺し合いに付き合ってもらうぜ！」

「おおっ！どちらかが死ぬまで楽しもうか！」

そんなこと言ったら俺は絶対に負けないぜ？

～不眠不休の戦闘が一ヶ月ほど～

「「ウオオオオーーー！」」

ーまだ殺し合いは続いていたー

「はあ．．．はあ．．．、殺しても死なないとか勝てるわけねえだろ！」

「はあ．．．はあ．．．ちくしょう、まだ弱点がわかんねえ！」

そろそろ戦闘を終わらしたいんだがな、どうしたらあの能力を突破できるんだ？

「ウオオオオー！やけくそじゃい！」ブンッブンッ！ドドドドド！ドカーンドカーン！

水を大量につかって一斉発射（フルバースト）だ！

「．．．！ちいっ！」ダッ！スタン

．．．避けた、だと？

「．．．ばれたか」

「．．．もしかして一つの干渉しか否定できないってことか？」

つまりは、水の剣を使っていた時は斬るという干渉だけを否定して、水の銃を使っていたときは貫通することだけを否定していたってことか？

「ああ、そういうことだ。致命傷は回避できるんだが、衝撃とかは否定できないから地味に傷を負っているんだよ」

おお、よく見てみれば結構ダメージ与えてるな

「てゆうか、それだけを気付くのにどんだけ時間がかかってるんだよ！」

「しょうがないじゃ無いか！」

一人が相手だったから剣と銃は別々に使ってたんだよ！爆弾は性質上水を回収できないし水の消費が激しいからあんまり使わなかったし

「・・・はあ、鬼である俺があまりのめんどくささに心が折れそうだったぜ。何回弱点を自分から教えそうになったことやら」

・・・ようするに、あまりのめんどくささに自殺しそうになったと？

「諦めるなよ！諦めるなお前！！どうしてそこでやめるんだそこで！！もう少し頑張ってみろよ！！」ｂｙ　熱血なテニスプレイヤー

「途中で諦めそうになったお前が言うな！」

ちっ、ネタが通じない奴め！

一忘れないように言いますが、今は遥かに昔です。ネタに反応できた永琳がおかしいだけです一

「はあ、負け決定か」

「・・・そういえば、なんで負けるのがわかってて逃げなかったんだ？」

「鬼は戦闘を至上とする妖怪だからな、例え負けるとわかってても逃げるなんて論外だ！」－ドンッ！－

うおっ！あまりの信念の強さに剛鬼の体から－ドンッ！－って聞こえたような気がするぜ！

「・・・じゃあ止めをさせてもらうぜ」

「ああ！来い！」

「これが俺の・・・全力全壊！」－ズドン！－－ズパパパ！－－ガガガガガ！－

剛鬼に能力について教えてもらったからな、できるかな？って思って空気中の水分を使って大量の水を召喚しようと思ったらできたぜ！

「ぐはっ！色々教えてやったのに躊躇いも容赦も無いな・・・」－ガクッ－

「悲しいけどこれ、戦争なのよね」

色々と教えてくれた剛鬼に敬礼！（、―′）ゞ－ビシッ－

「さてと・・・しっかり後始末をしないとな」

剛鬼と戦った後で疲れてるんだけどな・・・

「感慨深いが、この都市が残っていると厄介だからな、消させてもらうぜ！」

残っている力を振り絞って能力全開！

「ウオオオオオオオーーー！！」－ドッカーーーン！！－

く、もう力も妖力も残って無いぜ、ちょっと眠るか・・・な・・・・

－そしてこの日から千夜を見た者は居無いという－

「まだ・・・死んでねえよ！」－ガクッ－

－・・・どうやら今の叫びで正真正銘力尽きたようだ－

戦争の始まりだ！（後書き）

やっと一段落したぜ！次からは日本を放浪すると思います。

またキャラ崩壊が変態なことに・・・（前書き）

ーーこんな小説で大丈夫か？ーー

ーー大問題だーー

またキャラ崩壊が変態なことに・・・

「はあ・・・」

いきなりだが主人公の千夜だ、ただ今テンションがありえないくらい下がっている

「見つけたわよ、千夜」

その理由はな・・・

「さあ、諦めて私のものになりなさい！」

大人になったルーミア・・・俗に言うＥＸルーミアと言われる妖怪に（貞操を）狙われている・・・なんで最初からキャラ崩壊してんだよ！って思った奴いるだろ？じゃあ例のごとく回想をどうぞ

～回想～

戦った。気に入られた。

～以上～

「ちょっと！私の回想がやけに短いわよ！」

あん？なに叫んでんだ？

「ちゃんと私との出会いを思い出しなさい！」

ちっ、キャラ崩壊しすぎだろ。しょうがないからもう一回回想ＯＮ

～こんどこそ回想～

はあ～、あの戦争（月では第一次妖怪大戦と呼ばれている）から特にすることが無くなって今は日本を放浪している

「ああ、暇だ」

都市に居た時は暇つぶしのための道具がいっぱいあったからな、前は日常だったネットが今では恋しい

［ガオーーー！］

「ん？ほっ！と」－ボンッ－

［－ドスン・・・－ガウウウ・・・］

ん？今のはなんだって？妖怪が襲いかかってきたからちとグロイが体内の血液を爆発させただけさ。にしても・・・

［ギャー・・・ギャー・・・］

「・・・はっ！」－ダァンッ！－

［ギャウッ！］

「今日の昼飯確保～」

妖怪がだいぶ増えてきたな・・・こりゃまた人が増えてきたのかな？

「'ジュージュー'・・・今だっ！'上手に焼けました～！'・・・なんだ今の？」

妖怪は動物に妖力が宿って突然変異したようなものだからな、妖力をどうにかすれば普通に食える

ーここではそういう設定です。原作がどうかは知りません一

「'ガブガブ'ん～、調味料が欲しいな」

今食ってるのは鳥（プテラノドン的な姿）のような妖怪を血抜きしてからそのまんま焼いたもので、当然味が無い

「ん～、なんか暇つぶしになるものは無いかね～」

そんな感じに俺の旅は続くのだった・・・

～旅を始めて何年か～

よしっ、なんかいつもどうりに放浪してたら村が見つかった。・・・でも予想道理に「昔の村」ですって感じがするな・・・都市が異常だっただけか

「あの～、すみません」

「はい、ここは藻我の村です。」

え？藻我の村？もしかしてモンスター◯ンターか？

―これでわかる人いるかな？―

「ええと、町の名前では「はい、ここは藻我の村です。」いやだか「はい、ここは藻我の村です。」・・・だ「藻我の村って言ってんだろうが！」・・・はい、すみませんでした」

理不尽だ！・・・多分あの人はあれしかしゃべれないんだろう。他の人に話かけようか。・・・皆ああだったら速攻でこの村から出よう

―無限ループって怖いよねー

「あの～」

「はい？なんでしょうか」

あ、よかった普通の人だ

「あの、俺旅人でなにも持ってないのですが、食料をなにか分けてもらえませんか？」

「ええ、いいですよ」

やった！

「ありがと「ただし、」え？」

「少し外のお話を子供にしてもらっていいですか？」

「ええ、それくらいでいいならいくらでも！」

よし！これでしばらくは味のある飯が食えるな！

～村にきてから一ヶ月くらい～

「ほかにもな・・・」

「えーー！そーなのー！」・ワー！・・キャー！・

まだ村に居候しています。いやいや畑仕事の手伝いとかしてますよ？でもそれ以上にまた子供に好かれてね、旅に出ようとすると大人と協力してあの手この手で阻止すんだよね。え？大人も止めるのかだって？そうなんだ、あいつら俺を便利屋扱いしてんだよ！一回「俺は妖怪だぞ！」って言ったんだけど、「ふ～ん、そうなんだ。それよりこれをやって貰いたいんだけど・・・」って反応だったな・・お前ら信じて無いだろ

「それじゃあ今日はこれで終わり！」

「えーー、もっと！もっと！」・ブーブー！・

「うるさい！もうネタが切れかけてんだよ！」

もうすでに旅の話は終わっているからな、前世（現代）で有名な子供用の絵本を読んでやってるんだ（当然絵が無いから口頭だけで）

「・・・そろそろ旅に出るか（ぼそっ）」

「・・・！」・キラン！・

・・・なんかまた阻止されそうな気がする

「おーーい！大変だ～～！」

ん？なんかあったようだな

「○○○が村の何処にもいないんだーー！」

何！○○○がいないだと！？・・・で？誰なんだ○○○って

ーただの脇役なので気にしないで下さいー

・・・まあいい、それよりも捜しに行くか

'おーい○○○！どこに居るんだーー！'' ○○○ちゃんどこーー！'' あなたーー！○○○が見つからないのよーー！'' おお○○○よ、死んでしまうとは情けない'' なに不吉なこと言ってんのよ！'' バキッ'' アッーーーー'

・・・最後の二人は余裕だな、これを機に旅を再開するか

「「「「「「' じーーーー' 」」」」」」

「・・・なんだお前ら」

「お兄ちゃん！」「いなくなっちゃやだよ！」「まだまだあそびたいんだから！」「むらにもどってきてくれるよね？」

「・・・ごめんな、俺は出たらもう戻ってこないんだ」

「どうしてもだめ？」

「ああ、このままだと村に住み着いちゃいそうだからな」

「それでいいじゃん！」

「・・・いや、俺は妖怪だからな、人の中では生きていけんさ」

都市は一般人でも自衛手段があったし、何より永琳っていう絶対的な味方がいたから妖怪な俺を受け入れてくれたんだしな

「「「「「・・・'コクン'」」」」」

「よしっ、もしかしたら○○○が危ないかもしれないから俺はもう行くな！」

「「「「「・・・じゃあねーー！」」」」」

よしっ！そろそろ本当に行くか

ーー青年捜索中・・・ーー

む？強い妖力がゆっくり、でも目的を持ったように真っ直ぐ歩いてるな・・・こりゃ○○○が大妖怪に襲われてる可能性があるな、急がねえと

'いやーー！'

むむ！女の子の悲鳴！この子が○○○かな？

'ザザザッ'' バンッ' 「え？' ビュウン！'' キャアッ！' バ

ッ！－－ゴロゴロ－」－スタン－「俺、参！上！」－－ババーン！－

なんか金髪のえらい美人を蹴りそうになったような気がしたけど、
そうでも無かったんだぜ！

「・・・－ポカ～ン－」

「さあっそこの少女よ！妖怪はどこだっ！」

「・・・お兄ちゃんが今蹴りそうになったのが妖怪さんだよ？」

「ん？－くいっくいっ－なんだ？今取り込み中なんだ「とりあえず
死になさい－ブオンッ！－」うおっ！－ヒョイッ－いきなりなにす
んだよ！危ないだろ！」

「それはこっちが言いたいことよ！」

なんだいきなり逆ギレしやがって、そしてなんでこの妖怪は俺の足
下に転がってたんだ？なんかの流行りか？」

「あなたがいきなり蹴ってきたからでしょう！」

うおっ！俺考えただけのに、なんかの能力か？」

「自分でしゃべってるわよ！」

おおっと、どうやら自業自得だったらしいな。ここは正直に・・・

「ごめんなさい！」－ビシッ！－

「え?ええいいわよそれぐらい。・・・って違う!よくも私の食事を邪魔してくれたわね!」

「なんだ食事中だったのか、じゃあ邪魔しないように○○○と村に帰るわ、じゃあ邪魔したな!」-シュタッ-

「ええまたね~、ってそれも違う!というか私の食料を取るな!」

おお!なんだこの妖怪、ノリがいいな!そしていじりがいがある。反応を見る限り地味に優しいしな

「ああ~もう!ややこしいからあなたも食ってあげる!」

「え!?・・・初めてだから優しくしてね?///」

「なにを?・・・っ!///」

うわっwヤバイ永琳とは違う可愛いさがあるw

「///殺すっ!」-ブンッ!ブンッ!-

「顔を赤らめちゃって、かーわーい~いー!」-ひょいっひょいっ-

この妖怪は黒い大剣っぽいのを持っているんだが、冷静さが無い大振りの剣なんて避けるのは簡単さ

「///うがーーー!」-ブオンッ!-

「おっと!」-ひょいっ--ギュッ-

「な!?／／／・・・-ぷしゅ～～-／／／キュ～～」-ガクッ-

なにをしたかって?一番大きい隙を突いて抱きついただけさ。どうだ!羨ましいだろ!

「・・・なんか前にも似たような反応があった気がするな」

「／／／きゅ～～」

まああれは永琳の自滅だったけどね

～そのころの月～

「-ピキーン-はっ!」

「どうしたんですか?永琳様」

「・・・今千夜が私のことを考えた気がするわ」

ーどうやら永琳はまた電波を受信したようだー

～地上～

ん?今なんかあったのか?

「とりあえず、もう○○○も村に着いたみたいだし。この妖怪を連れてここから離れるか」

いつ○○○を送ったのかって?当然、この妖怪が俺に集中した瞬間に水で○○○を掴まえて村の方に-うにょ～ん-って感じで水の触

手を伸ばして直接村の中に送っといた。今頃村は大騒ぎだろうな

～回想終了～

そんな感じでな。この妖怪、ルーミアって言うんだが、ルーミアが起きた後色々あってしばらくは一緒に旅をすることになったんだ。その途中でなぜか気に入られてな、ちょくちょく貞操を狙われてる。・・・ところでルーミアって容姿と名前的に外国の妖怪なんじゃ無いのか？

一気、気にすんな！俺は気にしない！（ようにしてる）ー

まあ俺は関係無いから別にいいけどな。さて、

「また鬼ごっこの始まりだ！」ｰ ダッｰ

「待ちなさい！」ｰ ダッｰ

暇つぶしできるようになったってことでこの出会いも悪く無かったかな？

「今捕まって私と（ピーーー）するか後で捕まって無理矢理（ピーーー）されるか選びなさい！」

・・・でもできればもっとお淑やかな女性がよかったな～～、最初のウブだったルーミアはどこに行ってしまったんだ！

またキャラ崩壊が変態なことに・・・（後書き）

また一人変態に・・・

また俺一人か・・・え？また原作キャラ？（前書き）

最初は意味不明なくらい駄文です。でも後半あたりからは結構気に入ってます。
今回はちょっと急展開、というか別れるの早すぎ

また俺一人か・・・え?また原作キャラ?

「それで、これからどうすんのよ?」

「ん~いつも通りにあてのない旅でいいんじゃないか?」

おお、俺だ俺だ主人公の千夜だ。ただ今目的も無く森の中を放浪している

「はあ・・・なんで私もあなたも妖怪なのに人間を食っちゃ駄目なのよ」

「あれ?説明しなかったっけ?」

どうやらルーミアは戦闘（弱いものいじめ）をするのが好きなようで、前回やけに反応がよかったのはこれが原因だったようだ。（一種の興奮状態）普段はわりと普通の性格だった・・・つまんねえ」

「つまんなくって悪かったわね。それよりあんな説明で納得できるわけないでしょ、」-はあ・・・-

む?なにが悪かったんだ?俺は正直に言ったぞ?

「・・・わからん」

「・・・自分が言ったことをもう一度言ってみなさい」

「?・・・『よしっ!作戦は”命を大事に”だ!これから人を襲うの禁止!』・・・なにが駄目なんだ?」

命は大事にするものだろう?

「私たちは妖怪なのよ?妖怪は普通人を襲わないと消滅してしまうわ」

「・・・って言っても俺たち普通の妖怪じゃ無いから襲わなくても生きられるしな」

本当、普通は人を襲わないと妖力が弱まるはずなのになんでだろ?

―ここでの妖怪の定義を詳しく説明しよう。まず妖怪は二種類に別れる、それは『自然』タイプと『生き物』タイプだ。『自然』はそのまんまであり、自然の脅威に人間が恐れ、敬い、それが形となり神や妖怪になる。『生き物』は人間が負の感情(恐怖、悲しみ、欲望etc)を持った時に生まれる『妖力』がなにかに憑依(無機物でも生き物でもいい)して、その負の感情が大きければ大きいほど周りに影響を及ぼし、さらに人間がその影響に恐怖したりする、いわゆる負の連鎖(なんか違う)ができる―

―ついでに例とすれば 『自然』妖精、隙間(?)、ルーミア(闇)、千夜(水)etc 『生き物』天狗、鬼、吸血鬼etc 違いは、『自然』は数が少なく総じて最初から強い(妖精は別)。理由は自分の元(自然)がそのまま能力だから強力な能力が多いため。対して『生き物』は数が多く、有名なものは種族として確立する。ただし、同じ種族でも強さは千差万別であり、中には大妖怪に匹敵するのもいれば簡単に退治されてしまうのもいる。―

―最後に『自然』のタイプは自分の元となった自然が恐れられているかぎり(・・・)消滅はしない。つまり、もしその自然への恐怖

が無くなればたとえ『自然』の妖怪でも消えてしまう。（千夜は別、なぜなら神に与えられた不老不死があるから）（隙間なゆかりんも別、なにかしらの境界を操ってると思って下さい。・・・これ以上作者の頭では考えつきませんでしたｏｒｚ）―

ちなみに上の設定が役立つことは無いと思われる。・・・なに言ってんだ俺？

「まあ・・・今はそうでしょうけどずっとと言う訳には行か無いわよ？」

「そんときはそんときさ」

まあいつかはどう足掻いても全ての妖怪は忘れられるんだ。それまでに幻想郷ができるだろ－パキ・・・－ん？

「・・・」

「どうしたの？」

・・・油断したか、何時の間にか囲まれてる

「・・・ルーミア、囲まれてるぞ、どうする？」

「・・・ええ、今確認したわ。全部妖怪ね」－ウズウズ－

「・・・お前一人で大丈夫だな？」

「もちろん！」

「・・・じゃあ俺の分「ハアアアアーー！」・・・聞いて無いな」

「ハイッ！」ザシュッ」グアアアー！「ハアッ！」ズシュッ」ギャアアア・・・「アハハハハ！」ギュウン！」ズパパ・・・」

・・・どっか行っちゃった。まあまたどこかで会うこともあるだろう（放置）。さてと、また一人旅か。またどこかの村？町？で暮らそっかな

「まあ明日は明日の風が吹くだろ。とりあえず今日の寝床を探そう」

」・・・アーーッハッハッハー・・・」ズパパパパ・・・・・」

・・・そんなにフラストレーション溜まってたのかな？

ー しばらくルーミアは出ません、いつ再登場するかは気分しだい。・・・てゆうかＥＸルーミアはキャラがわかりにくいので、次出る時は幼女化しています ー

「ん～お！なかなか良さそうな所を発見、今日はここで寝ますか」

町捜索は明日ってことで！ではお休み～

～朝～

」ガオー・・・ガオー・・・」

ん～、朝か？まだ眠いな、寝よ

～昼～

「ふあ～～、久しぶりにゆっくり寝た～」

おふぁよう、千夜さんだよ。ルーミアが居た時はずっと貞操を狙われてたからな、まずゆっくり寝れなかった。しかもルーミアは能力的にも存在的にも夜は強くなるしな。経験値では圧倒的に俺が勝ってるんだが夜のルーミアは全快の時でも負けそうになるからな、前に眠さが限界（気を抜くと倒れそう）な時に襲われて危うく犯られそうになったんだがその時は抵抗をしなかった（できなかった）。いざ俺を襲うぞ！ってとこで自分が犯ろうとしたことを想像（妄想）したのか、一気に顔を赤くして倒れたんだよ・・・べ、別に期待なんて（ｒｙ

「さってっとっ、そろそろ捜しに行こうか！」

でもその前に、

「狩りの時間の始まりだ・・・！」ｰシュバッｰ

朝飯（兼昼飯）を調達するか

ーーーーーーーーーーーーーー

「ｰもぐもぐｰ・・・ふーー！食った食った！」

今回の献立：猪っぽいのの丸焼きと村で教えてもらった食える植物のサラダ（苦いだけ）とそこらへんで拾った食えそうな木の実（これが一番美味かった。ちょっと胡桃に似てた）

「よし、出発！」

どっかに人いねえかな？

「そんな都合のいいことがある訳がな・キャーー！・・・・あったよ」・ダッ・

これがご都合主義ってやつかねえ

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーー初の主人公以外の視点ーー

しくじったわ！今日もお父様が相手をしてくれ無くて暇だったから護衛を振り切って森まで来たのに妖怪に遭遇するなんて！・・・今日も皆あの女（・・・）の方に行ってるだろうからこの森には誰も居無いだろうし・・・べ、別に誰か（お父様）が捜しにきてくれ無いかな？って期待してる訳じゃ無いのよ？ただちょっと暇だから抜け出しただけよ？

「これもそれもあの女のせいなんだからーー！」

う～～！思い出しただけで腹が立つ！なんであんな女がいいのよ！私だって！・・・だって、その、い、今は胸とかは無いけど、将来はきっともっとこう、なんて言うか・バイーン・って感じになってるはず！うん、はず！

［ギャオオオーー！］

「キャーー！」

そうだ！今はそんなこと考えて・・・そんなことって何よ！私にとっては大切な［ギャーーー！］うわ～～！それより逃げなきゃ！

「もうお父様じゃ無くてもいいから誰か私を助け' ドカッ！' ［ギャウッ！？］え？」

' ガッ！' ' キキーー・・・ピタッ！' 「女の子の悲鳴を聞きつけ俺、参！上！」' ドカーーン！'

「・・・ほえ～～」

なんで爆発したんだろ？・・・でもなんかちょっとカッコイイかも

ーー再び主人公視点ーー

決まったぜ！いままで登場シーンの練習は毎日（頭の中で）してたからな！あと背後の爆発音は空気中の水分を使って手抜きで作った即席の水爆弾だ！

「そこの少女よ、怪我は無いかい？」' キリッ'

おい今キモいって思った奴、俺んとこまでこいや

「' ポ～～／／／／' はっはいっ！大丈夫です／／／／！」

ん？顔が赤いな。風邪か？

ーあれ？千夜って鈍感属性だっけ？って思った人がいるでしょう。実は千夜は結構な鈍感です。でもどっかのとある不幸な主人公ほど

ではありません。はっきり言われれば気付きます。・・・態度はまったく変わりませんが。ついでに思わせぶりな行動をするだけでは気付きません―

「よしよし、とりあ［ガオーー！］・・・まだ死んでなかったか」

「あっ危な「ふんっ‐バキッ‐」［ギュガッ！］え？」

「ふん、俺に喧嘩を売ろうなど三日ぐらい早いわっ！少なくともただの裏拳ぐらい耐えられ無いと自然界では生きてゆけんぞ？」

「三日なんですか！？それよりあれは”ただの”って言える威力ではありません！」

なんだ？ただの裏拳で５０メートルぶっ飛ばすくらい誰でもできるだろ？

―千夜の周りが異常だっただけです―

「まあいい、それより無事か？」

「え？ああはい、大丈夫です。ありがとうございました」‐ぺこり‐

「ん」‐なでなで‐

「ふあっ／／／」

「なんだ？嫌だったか？」

「いいえ！そうじゃなくて・・・その／／／（お父様以外に撫でら

れるの始めて／／／気持ちいいな・・・」

ーテテテテッテテーー！千夜はナデポ（幼女及び少女限定）を手に入れた！これは好意のある人間（と妖怪）にやると好感度が上昇します！ただしやりすぎると中毒になりますので注意してください！ー

「それより町に案内して貰いたいんだがいいか？（なかなか上等な着物を着てるし、町くらいはあんだろ）」-ぱっ-

「（あ、もうちょっとしてほしかったな・・・）・・・はい、いいですよ！私の家に案内します！」

「え？いや町までいいんだ「さあっ！行きましょう！-グイッ-」」・・・まあいっか」

どうせならしばらく居候させてくれないかな？無理だな、この少女が許しても親が許さんだろ

「それより名前はなんて言うんだ？俺は千夜だ」

「千夜さんですね！私は妹紅、藤原妹紅（ふじわらのもこう）って言います！」

えっもこたん？なにそれ怖い。俺原作キャラに会いすぎじゃね？

ーそれが主人公の運命（さだめ）だーーｂｙ　作者ー

「それより町に行きましょう！」

「あ、ああ」

まあいっか。それよりまた次回会いましょー

また俺一人か・・・え？また原作キャラ？（後書き）

もこたんinしたお！作者はもこたんが好きなので変態にしない予定です。これから不定期になると思います、ご了承して下さいｍ（＿＿）ｍ

最後に！こんな小説を読んでくらさる皆さんに敬礼！（ゝ＿ノ）ゞビシ

もこたんの家にＩＮしたお！（前書き）

いやっふー！５０００字いったー！
やっとだよ。・。・（ノД`）・。・。まあ時間がかかってしまいましたが
それでは本編をどうぞ！

「どう？大っきいでしょ！」－ドン－

「・・・はっ！」

「鼻で笑われた！？」

俺は千夜だぞ！・・・いやなんでも無い。今妹紅の家についたとこなんだ、にしても・・・

「・・・まさに豪族の家だな」

「・・・あまり驚か無いのね」

「ん？たしかにお前の家だが別にお前が当主じゃないんだろ？それにいいとこのお嬢ちゃんだってことは着物からわかってたさ」

「・・・私が貴族だから助けてくれたの？」

「そんな訳ないだろ、悲鳴で駆けつけたんだから姿なんて確認して無いし」

まあ無事かどうかのためチラリと見たからいいとこのだってことはわかってたが、それがもこたんだとは思わなかったんだぜ！

「そ、そう（やっぱりカッコいいかも／／／）」

「お？いきなり黙ってどうした？」

「な、なんでも無いわよ！」

「うおっ！いきなり叫ぶな、驚いただろ」

「それより家に入りましょ！」

そう言えば家の前で言い争ってたな

「じゃあお邪魔しますよっと」

「ええ、客人よ歓迎するわ」

「・・・今更貴族ぶっても遅いぞ」

「うるさい！」

俺は素のほうが好きだけどな。正直だし、可愛いいし」

「えっ！？かっかわっ／／／」

ん？また声にでてたか、まあ・・・

「実際そう思ってるしな」

「～！／／／」

おお、恥ずかしさで言葉が出ないか

「～～！／／／」- バッ-

「あっ、行っちゃった」

大丈夫かあいつ?顔を赤くしたまま屋敷の中に入っていったが、俺も入っていいのかな?

「-ギギイ・・・-すみません、妹紅様にお客様が来てるので歓迎して貰いたいと言われたのですが、貴方様がお客様なのでしょうか?」

「おおう?そうだ俺が客人だと思うぞ?一応」

「そうですか、ではこの屋敷を案内させていただきます。この屋敷の使用人です」

どうやら屋敷にいくらまっても入ってこないから不審者か?って疑われていたようだな

「それでは客室に御案内させていただきます」

「ああ、すまないな」

「いいえ、これが仕事ですのでお気になさらず」

・・・なんか月なお姫様（望月）に出てくる主人公のメイドに容姿と性格がちょっと似てるな。さすがに髪はあんな色じゃ無いけど

「ま、気のせいか」

「ええ、私は別に完璧と言えるほどの能力ではありませんので」

「・・・とりあえずなんで考えたことにピンポイントに反応できるんだ！とか、いやいや充分有能でしょ、とか言いたいことはあるが、それは置いといて能力があるのか？」

「はい、あります」

「・・・なんて言う能力？」

「それはお答えできません」

・・・まあ初対面の奴に能力を教えてくれるはずが無い、か

「それよりここが客室となっております。こちらで不比等様が帰ってこられるのをお待ち下さい」-ぺこり-

「あ、ああ」

「それでは何かあればお呼び下さい。失礼します」-スタスタ-

「・・・ぱっぱっと言うことだけ言ってどっか行っちゃったよ」

まあもう会うことはーーー

ー作者が結構気に入ってるのでまた登場しますー

ーーーありそうだな

「・・・それよりどうしようか？たしかに豪華な部屋なんだが、当然暇つぶしのための道具なんて無いしな」

さてどうするか・・・

「とりあえず寝るか」

やることも無いしね。それじゃあお休み～

～何時間か後～

ん～、なんだ？なんか腹あたりに重さを感じるんだが

－こそこそ－「（今のうちにイタズラしちゃおっと）」「妹紅様、そう言うことはしてはいけませんよ？」「（しー！千夜が起きちゃうでしょ！）」「それならもう起きてしまっているので問題無いかと」「えっ！？」

・・・なんで起きてるのがわかったんだ？

「おはようございます－ぺこり－乱れていた呼吸が規則的になっていたようなので」

「・・・おはよう、それよりナチュラルに心を読むな」

「いいえ、そう考えていそうだったので。後応接間にて不比等様が待っております、準備ができしだい来て欲しいと申されておりました」

「ああわかった。すぐに向かおう」

「・・・あれ？私空気？」

ー強く生きて下さいー

よし、じゃあ行くか！

～青年移動中・・・～

「こちらが応接間となっております」

「おお、案内ありがとう」

「いいえ、それでは失礼しますー ぺこりー ー」ー スタスター

「よし、入る「ちょっと待ちなさいよ！」妹紅居たのか？」

「始めから居たわよ！」

そうなのか？まったく気付かなかった

「それよりお父様に会いに行くんでしょう？だったら私もついて行くわ」

「なんでだ？」

「私が居た方が説明しやすいでしょう？（それと無いとは思うけど変なことを言わないようにね・・・）」

そうだな、よし！応接間に入るか！

「お父様入るわよ～」ー スパーン！ー

「ちょっ！娘とは言えそんな入室の仕方でいいのかよ！」

「ん？妹紅か、いつも言ってるだろう襖はゆっくり開けなさいって」

「別にいいでしょう？」－ぶーぶー－

「そんなんじゃ娶ってもらえんぞ・・・」－はあ・・・－

「余計なお世話よ！」－ビュン－

「おっと－パシッ－まだまだ甘いな」

・・・え？この家って一応貴族の家だったよね？なのになんでこんなにアグレッシブなの？

「妹紅よ、客人が戸惑ってるからいいかげんやめなさい」－パシッパシッ－

「・・・しょうが無いわね」－スッ－

「客人よ、よく我が家に来てくれた。歓迎するぞ」

切り替えが早すぎる；

「私の名前は藤原不比等（ふじわらのふひと）と言う。よろしくたのむ」

「ああはい、お・いや私は千夜と申します。どうかよろしくお願いします」－ぺこり－

「おおよろしく。それより自分の喋りやすい喋り方でいいぞ？」

「・・・貴族がそれでいいのか？」

「いやなに、誰でもこうという訳では無いよ。ただ妹紅を助けてもらったんだしそれくらいはいいだろう！って思っただけさ」

まだ説明して無いはずなんだが・・・

「あれ？妹紅が言ったのか？」

「ええ、あなたが寝ている間にお父様が帰ってきたから軽く説明しといたわ」

「そうか、ありがとう。それよりなんて呼べばいい？」

「不比等で構わない」

「そうか、では不比等よ、頼みたいことがあるんだが・・・」

「なんだ？だいたいの言うことは聞いてやろう」

そうか、ならちょっと言ってみよっと。ふひひひひ・・・

「妹紅を俺に下さ「死にたいか？」ジャキン」いえいえ冗談ですよ」

怖っ！なんか不比等の両手に刀が出てきたんだけど！どこに仕舞ってたんだ？

「・・・／／／／（フリーズ中）」

「ん？おーいもこー？もーこたーん？・・・反応がねえな」

「それより本題はなんだ？さっきのが本題だって言ったら斬り捨てる・・・！」チャキン」

「うおっ！その刀仕舞えって！で、本題はしばらくこの家に泊めてもらえないか？ってことなんだが・・・大丈夫か？」

「・・・できたら拒否したいとこだが妹紅を助けてもらった恩があるしな」ギリギリギリ！

「いやいや！そんなに嫌なら拒否していいって！」

じゃないと妹紅に触れただけで斬られそうだよ！

「拒否したいと言うのは冗談だ。歓迎しよう」スッ

「・・・絶対目が本気だった」

「気のせいだ」

はあ・・・俺は不死だが痛いもんは痛いんだよ

「それよりもお前ーー」

「ん？なんだ？」

なんかあったっけか？

「ー妖怪だろ」

「・・・！！」ー ババッ！ー

油断した！一応妖力を抑えてたのにバレるなんて！

「ああ警戒しなくていいぞ。退治する気は無いからな」

「・・・なんでだ？」

「私には能力があってな、それがー本質を見抜く程度の能力ー なんだ」

・・・つまりは嘘が効かないってことか

「・・・と言うことは俺が妖怪だってことを見抜き、そして害が無いってことを見抜いたってことか」

「そうだ。でもお前の本質はバカだったのによく理解できたな？」

「誰がバカだ！」

ちくしょう！なんだよ本質：バカって！

「それよりもここに泊まりたいって話だったな。別にいいぞ」

「そうか、ー はあー」

ん～疲れちまったな。また寝るか

「後泊まるんなら対価として妹紅の護衛と話し相手になってもらいたいんだが」

「・・・対価取るのかよ。まあそれくらいなら別にいいけどね。たのまれなくてもしてたけど」

妹紅のことは気に入ってるしな

「・・・そうか、ありがとう」

「ん、聞きたいことがあるんだがいいか？」

「・・・私が妹紅の相手をあまりしていない理由か？」

「ああそうだ」

おそらくだが、妹紅があんな森の中にいたのは不比等が理由のはず。ならば今言った相手をしていないのが理由だろう

「・・・実はな、今町で噂になってるかぐや姫という者に興味があってな、いつもどうにかして会えないかと考えているんだかなかなか会えない。これはどうしたものか？と思いふけっていたのだがそのせいで最近そのせいで妹紅の相手をするのを忘れてただけのこと」

「・・・バカなのか」'はあ・・・'

「バカにバカとは言われたく無いな」

「・・・お前は子供か（ぼそっ）」

「にしてもそうか、妹紅が突然家を抜け出したのはこれが原因か。危ないことをしたものだな」-はあ・・・-

「・・・わかったなら妹紅の相手をしてやれよ」

「それはまだ無理だ」

「なぜだ?」

俺が思うに不比等は妹紅に冷たい訳ではない、むしろ親として愛してると言っていいだろう（今禁断の親子愛だとか思った奴表に出ろ）。なのに何が駄目なんだ?

「今はかぐや姫に会ってみたいからこれからも家に居る時間は少ないからな」

そうか・・・ん?いや待てよ?確か東方のかぐや姫ってあれ（・・・）だよな?なら不比等の能力は本質を見抜くんだからあれに会おうなんて思わないはずなんだが・・・

「なあ不比等よ」

「なんだ?」

「かぐや姫の本質は見てないのか?」

「・・・私の能力は本人を直接見ないとわからんのだよ」

そうだったのか・・・

「だがかぐや姫を娶るのは難しいと思うぞ？」

「ん？誰がかぐや姫を娶りたいと言った」

え？

「違うのか？」

「ああ、ただの興味だ」

マジかよ・・・

「なら別にいいじゃねえかよ！」

「何を言う！世界で一番美しいと言われているかぐや姫だぞ！一回ぐらい会ってみたいだろう、例え中身がきたなくとも」

・・・はい、ここのかぐや姫は中身が怠けることとと暇つぶしを考えてばっかです。絶対本質を見たらなにこれ？って思うよな

「・・・そうか、がんばってくれ」

「ああ、後お前の世話は翠（みどり）にまかせる」

「翠？」

「お前をここまで案内した使用人だ」

「・・・ああの人ね」

「まあこの屋敷に居る使用人は翠だけだがな」

・・・え？マジで？

「このでっかい屋敷を一人でどうにかするってどんな化け物だよ・・・」

あの完全で瀟洒なＰＡ○長だってメイド妖精を雇ってるんだぞ（あまり役に立って無いようだが）

「それは翠の能力でどうにかなってる」

「・・・本当にどんな能力なんだよ」

すっげえ気になる

「それは翠に聞いてくれ。それより妹紅、そろそろ起きろ」－ブン－

「・・・－ガスッ－痛い！なになになんなの！？」

・・・ずっと居たのに喋らなかったのってまだフリーズしてたのかよ

一決して作者が忘れてた訳ではありませんよ？ええ違いますよ？一

「そんなことより今はもう暗い、今日のところはもう寝てしまいなさい」

「痛たた、そうね、もう寝ようかしら」

「そうだな、眠いし寝るか」

「・・・あなたはずっと寝ていたでしょう？」

「それでも眠たくなるもんだよ」

「それでは失礼、私も寝させてもらおう」

「ああお休み～」

「お父様お休みなさい」

「また明日の朝に会おう」

それじゃあ眠るか・・・

「客室はこちらです」

「いや、俺は覚えているからいい。それよりそこで船を漕ぎだした妹紅を部屋に送ってやってくれ」

「・・・-こっくり、こっくり-」

「そうですか？ならばそうさせていただきます。妹紅様、部屋はこちらですよ。千夜様、お休みなさい」-ぺこり-

「・・・ん」-こっくり、こっくり-

「ああお休み」

さて、寝るか

もこたんの家にＩＮしたお！（後書き）

やべぇ．．．船を漕ぐもこたんを想像したら鼻から赤い情熱が出そう（＞人＜；）

そんなことよりこんな小説を読んでいただきありがとうございます！これからもできたら応援してやって下さい！

・・・俺この家に来たのは早まったかな？（前書き）

ちなみに今の妹紅は黒髪の美少女です

さあ今回も頑張ろうか！

・・・俺この家に来たのは早まったかな？

ういっす、俺は千夜だ。ただ今ちょうど起きたとこなんだが・・・

「・・・食事はどこでするんだ？」

そうだ、どこに行けばいいかわから無いんだ

「・・・まあ適当に歩いてた「おはようございます。千夜様ー ぺこりー」うおっ！いきなり後ろに出てくんなよ；」

「すみません。食事はこちらです」

・・・うん、反省して無いよね？

「これから気をつけさせていただきます」

「・・・そうか、案内してくれ」

もう諦めたよ・・・

「かしこまりました。こちらです」ー スタスター

「ああ、朝から疲れたよ。もう寝ていいかい・・・？もこラッシュ」

あれ？なんか必殺技の名前みたいになっちゃった

「・・・」ー スタスター

しかも反応が無いし

「こちらです」

「そうか、ありがとう」

「いいえ、それでは失礼します」‐スタスタ‐

本当にやることだけやってすぐどっか行っちゃうよな～。家政婦の◯タです。的な？あそこまで常識知らずでは無いけど

「まあいい、それより朝食を食うか」‐スーー‐

「これは私のよ！」「何を言う！私の皿から奪うな！」「いいでしょう！育ち盛りなんだし！」「大人しく座って食いなさい！」「じゃあその変わりこれを貰うわ！」「どんな理屈だ！」‐ギャイーン！‐‐シュバン！‐‐バキャン！‐

「・・・」‐スーー、ストン‐

俺は何も見なかった。さて部屋に戻ろ「‐スパーン！‐何をやってるの千夜？早くこっちに来なさい」・・・逃げれなかったか、と言うかなんで箸であんな音が出るんだよ・・・

「・・・なんでこんなに争ってるんだ？」

「「何を言う（ってるの）？食事は戦争だぞ（だわよ）？」」

「・・・息ぴったしですね。それはもう俺が入れ無いくらいに」

できれば俺はこの二人と別な場所で食いたいな～

「何を言うんだ、この家に居候するならこれくらい慣れてもらわないと困るぞ？」

「？これが普通じゃ無いの？」

「断じよう、これは絶対に普通じゃ無い」

これが普通でたまるか！

「そうなの？あまり外と交流が無いからわから無いわ」

そういえば妹紅って隠された娘って設定だったっけ？確か妹紅は三女より上って・・・忘れた

「・・・そうなのか」－そーー－

「そうよ。で？沈んだふりしてどこに行こうとしているのかしら？」

－ガシッ－

「－ビクン！－いや聞いちゃいけ無いこと聞いちゃって気まずいから俺は一旦出て行こうかなって思って「気にして無いから。座りなさい－ズウン！－」・・・はい」

なんなんだこの威圧感は！剛鬼（第１０部参照）よりも怖いぞ！

「・・・」－パクパク－

不比等は我関せずでずっと食いっぱなしだし・・・

「あーー！お父様それを渡しなさい！」－－シュピーン！－

「・・・ふん！」－ガキャーン！－

俺こんな家でやってけるかな・・・はあ

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「それでは行ってくる」

「・・・またあの女のとこに行くの？」

「ああそうだ」

「なんでよ！別に行かなくてもいいじゃ無い！」－ダン！－

おお千夜だぜ！ただ今食事が無事に終わった（不比等と妹紅ってずっとおかずの取り合いをしていたがさすがにこっちまでこなかった。・・・慣れてきたら俺も狙われそうだけど）ら今度は親娘の修羅場を見せられてる。・・・正直もう腹一杯なんだが（二つの意味で）

「それでも行くんだよ。」

「なんで・・・なんでなのよ・・・！」

あ、それを聞いちゃ

「好奇心だ！」－ドン！－

「・・・え？」

やっぱそういう反応になるか。ていうか今まで説明して無かったのかよ

「不比等よ、妹紅に説明して無かっのか？」

「ん？ああ聞いてこなかったからな」

「・・・そんな理由で今まで私の相手をしてくれなかったの・・・？」ｰプルプルｰ

「そうだ！」ｰドン！ｰ

なんでさっきから不比等はドヤ顔なんだよ、後気付いて無いようだが妹紅が怒りでプルプル震えてるぞ？

「お父様なんて・・・」ｰプルプルｰ

「ん？どうした妹紅？厠なら向こうだぞ？」

あーあ、それは言ったらｰブチン！ｰ・・・なんか切れてはいけ無いものが１００本くらい同時に切れた音がしたぞ

「お父様なんてもう帰ってくるなーー！！」ｰガオーー！ｰｰブウン！ｰ

「どうした妹紅？そんなに猛って」ｰヒュパンｰ

「なんでそんなに冷静なんだよ不比等；」

今あったのは妹紅が殴りかかってそれを不比等が横から平手打ちをして受け流したんだ。にしても女性の本気の怒りはマジで怖いぞ、昔永琳と居た時にちょっとしたミスで本気で怒らせた時があったんだがあの時は確か・・・（ピーーーー）駄目だ思い出してはイケナイ、詳しく描写するとＲ１８指定になってしまう（もちろんグロテスクな方で）

「ん？妹紅はたまにこうなるからな」ｰシュッ、パァン！ｰ

え？何それ怖い

「ウガーーー！」ｰビュビュビュビュビュ！ｰ

「はっ！」ｰシンシンシンシンシンｰ

・・・なんだあれ？お前ら本当に人間か？妹紅が拳を分身してるように見えるくらいの速さでパンチして、それを不比等が受け流す。・・・言うのは簡単だが実際にやるのは不可能に近いぞ？不比等なんて受け流しが完璧すぎて妹紅のパンチが自分からそれてるように見えてるし

「それでは行ってくる」ｰｰピシン！ｰ

「あ痛！」ｰバッｰ

「・・・ああ行ってこい」

今の戦い：勝者不比等、決まり手はデコピン

「うう～～！お父様のバカーー！」

「ほらほら俺が居てやるから元気だせ」－なでなで－

「む～～／／／」－ポスン・・・－

「おおっと－ストン－どうした？」

なんか妹紅を後ろから撫でてたら寄っかかってきたからバランス崩して倒れそうになったからあぐらをかいた状態で座ったらその足の間に妹紅が座ってきた

「ん・・・－こてん－疲れたからしばらくこのままでいさせて？」

「・・・別にいいぞ」

「ん・・・」

・・・やべえ、俺ロリコンじゃ無いのに甘えてくるもこたんにヤられそう

「・・・－スーー－」

「・・・寝ちまったか」

できれば今居るところが玄関（に近い場所）だから移動したいんだが・・・こんな時に翠さんが居たら「お呼びしましたか？－スッ－」うおう！

「いつから居たんだよ！」

「？今きたばかりですが、なにか問題でも？」

「いやいやタイミングが良すぎるだろう！」

「そうですか、それでは妹紅様を寝室まで送ります。千夜様はどうなさいますか？」

・・・もういいや

「・・・俺も寝させてもらうよ。今日は朝から疲れたし」－はあ～～－

「そうですか。おやすみなさいませ。－ぺこり－それでは失礼します」－ヒョイッ・・・－－スタスタ－

ああ、まだ朝早いけど寝るか。信じられるか？あんなに色々あったのにまだ起きてから一時間もたって無いんだぜ？だって起きた⇒朝食⇒修羅場⇒不比等出発だもん。それでも俺は寝るけどな！

「－スタスタ・・・スタン－よし客室に着いた。さてと寝るか」

それでは皆さんお休み～

～昼時～

ふあ～～、まるで夜更かしした後みたいにずっと寝てたんだぜ！まあ夜更かししなくてもこんなもんだけど

「さて・・・起きるか」－グ・・・ポスン－

あら?なにかが抱きついてて起き上がれ無い、「ううーん…もぞもぞ…」…今の声は…

「…バッ…なんで妹紅が俺の布団の中に入ってるんだよ…」

「ん～～、あれ?千夜起きたんだ～～」…にぱ～～☆…

お前は某なく頃にの魔女か…しかし不覚にも萌えてしまったｏｒｚめっちゃ寝ぼけてるし…

「なんで俺の布団の中に入ってるんだ?」

「ん～それはねぇ、おこしにきてきもちよさそうにねてたからわたしもねむくなっちゃって～」…ほにゃ…

…やべえ、可愛い…俺ロリコンでいいかも

「それよりみどりがちゅうしょくできたって～～」

「そうか、わかった」

「じゃあはやくきてね～」…トテテテテ…

ああそんな寝ぼけてるのに走ったら「ぷぎゅ!?…どてっ…」やっぱりころんだか

「それじゃあ俺も行くか」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「「ご馳走様でした！」」

「お粗末様です」- ぺこり-

ふー！食った食った！特に何も無く食事が終わった（妹紅は大人しかったぜ！）。それにしても翠さん「翠で構いません」・・・そうか（考えを読まれるのは諦めた）、翠が作った飯は美味いな！できれば嫁に欲しいぜ！」

「あーー！何を言ってんの！翠は私の家の大事な使用人なんだから渡さないわよ！（それに千夜は私と！・・・何考えてるの私！？）」

なんだなんだ、また声にでてたか。妹紅は怒ったり赤くなったり忙しそうだな。・・・そういえば翠からの反応が無い

「・・・／／／」- ぼ〜〜-

「・・・翠？どうしたんだ？」

「／／／・・・はっ！し、失礼しゃせていただきます！」- ドタドタ-

・・・珍しく翠が焦ってたな。そんなに俺とそうなるのがイヤか？

ーやっぱりこいつバカだー

「・・・（翠も千夜のことが好きなのね・・・！”も”って何よ”も”って！）」

「ふーー、じゃあ俺は散歩でも行ってこようかな？」

「・・・（いやたしかに千夜のことはかっこいいし気に入ってるけどそれは別に好きって訳じゃあ・・・あれ？好きってなんだろう？もしかしたらこれが・・・）」

「ん～？あー、また妹紅が反応無い状態になってるし、しょうがないから翠に「ｰガシャーンｰキャーー！」・・・は無理そうだな。黙って出てくしかないか」

え？行かないって選択肢は無いのかって？そんなのは存在しない！俺は今どうしても散歩に行きたいんだ！・・・決して暇だからという理由では無いぞ？

「それじゃあ出発！」

「いやいや他の理由である可能性も・・・ｰぶつぶつｰ」「ｰバシャーンｰうみゅっ！」

・・・後ろから聞こえてくる音は気にしないで行こう。・・・なんか翠の悲鳴がやけに可愛いかったぜ

・・・俺この家に来たのは早まったかな？（後書き）

翠がちょっとでも可愛いと思ってくれれば嬉しいです

そんじゃあまた次回～

ぐーやとの遭遇（前書き）

ＰＶ１００００突破！ユニーク１０００突破！

果てしなく今更ですね（¯▽¯）ゞそれでもこんな小説を見て下さってる皆様に感謝を！！

まあ小説検索の新着順の一番上にあったから読んだって人が大半なんでしょうね・・・

そ、そんなことより本文をどうぞ！

ぐーやとの遭遇

「あなたちょっと待ちなさい！」ｰ バッｰ

「だが断る！」ｰ ひらっｰ

俺が千夜なのさ！ただ今町の中を爆走中です。理由は後ろで追いかけてきているなよ竹のかぐや姫（笑）のせい

「あなたのせいで私は・・・私は！」ｰ ビュウン！ｰ

「ｰ ズパン！ｰ うおっ！俺とお前は初対面のはずだぞ！」

都市にいた頃はずっと永琳の家にいたし、最終的には繁華街とか行ったけど俺は妖怪だからお偉いさんには会えなかったし（会おうともしなかった。永琳もお偉いさんだが都市最強でもあるので別）

「あなたのせいよ！私が永琳にお仕置きされたのは！」

「知るか！お前は早く讃岐造（さぬきのみやつこ）の家に帰れ！」

讃岐造っていうのは竹取の翁の名前な

「あの家は暇なのよ！・・・確かにお爺さんたちはいい人たちだから居心地はいいんだけどね・・・」ｰ しょぼんｰ

（無視）では出会った時の回想をどうぞ

～回想～

「ふう・・・これでだいたいは回ったな」

ういっす！今はもうだいたい町を見終わったときだ

「あ～、竹取物語の舞台になる翁の家に行って無いな」

せっかくだし行くか

～青年移動中・・・～

「ここか・・・」

思ってたより大きくないな・・・

―それは藤原の家を先に見てしまったからです―

「まあいいや、それより人で溢れかえってると思ったんだが一人もいないな・・・」

―今はもう竹取物語でいうと色好みの５人の公達しかいない時期です。ようするに興味だけでぐーやに会おうとした人たちはまったく会えないので諦めた頃です。・・・じゃあここの不比等はなんなんだろうか？―

「ん～、とりあえずもう見たから帰ってもいいんだがな。それはなんか負けた気がするから家の周りを一周したら帰ろう」

～青年巡回中・・・～

以下感想

「おお～、あの壁にある棘は不審者対策か？」

「あそこは・・・やけに部屋がでっぱってるな」

「お？地面に穴が空いてる・・・やけに深いな。掘った人頑張りすぎだろ；」

「ん？あそこに怪しい人影が・・・」

感想終わり

ん～、あれは見た感じ女かな？

「-こそこそ-（人がいなくなったから家から出よっと♪）」

む～、警告するべきなのか問答無用で捕まえるべきか・・・

「ん？・・・黒い髪、黒い目、普通な容姿・・・そして決めてはバカっぽい雰囲気！さてはあなたが千夜ね！」

「ちょっと待て！」

なんでそんな特徴で俺だって断定すんだよ！絶対俺よりバカがいるって！

ーバカがバカをバカにしてるのってバカっぽいよねー

「そんなことはどうでもいいのよ！あなたが千夜なのね？！」

「ああそうだがお前は誰だ？」

はて？こんな美人（失笑）に会ったなら覚えてるはずなんだが？

「ふん！私の姿を見てなんか思わないのかしら？」－ピシッ－

なんか決めポーズをとりだしたんだが・・・たしかに素材がいいだけに中々決まってるんだが性格を考えるとちょっと・・・

「・・・なんか反応しなさいよ！」－ビュッ！－

「・・・おっと」－シュパン－

不比等の受け流しが真似できたぜ！

「なによ！当たりなさい！」－ババババッ！－

「ほっと」－パンパンパンパン－

でもさすがにあそこまで完璧にできないな・・・要練習かな？

「～～！こうなったら！」－ジャキン－

「ん？刀か？・・・」

おかしい、こいつは発言と容姿から察するにかぐや姫（爆）なはず・・・ならば未来武器的なものを出すと思ってたんだが

「それっ！」－ブウン！－

「そんな大振りが当たる訳がなあっ！？」・ズッ！・

なんだあの刀は！今軌道が９０。以上に曲がったぞ！水の盾が無かったら一刀両断されてた・・・

「残念だったわね！この刀は都市製で自動追尾機能がついてんのよ！」

「なんかドラ◯もんでもそんな道具あったな！」

ー名前は忘れましたー

ちくしょう！あのかぐや姫（確定）は俺を殺す気か！

「三十六計逃げるに如かず！」・ダッ！・

「あ、待ちなさい！」・タッ・

意味がわからないのに切られてたまるか！

～回想終了～

「ちょっと・・・・はあ・、待ちなさいよ・・・・はあ・」

「・・・お前体力無いんだな」・ふう・・・・

まだ走り始めて１０分たって無いぜ？

「仕方ないでしょう！私は生粋のお嬢様なのよ！」・キーー！・

「その割にはお嬢様っぽく無いな」

「・・・あなたは永琳相手にお嬢様な性格でいられると思う？」

「・・・なんかすまん」

「もういいわ」－はあ・・・－

「それよりなんで俺は追いかけられたんだ？」

もうだいぶ落ち着いてるし聞いても大丈夫だろう

「ああそれね、それはこういうことだわ」

～ぐーやの回想ＯＮ～

ーカグヤｓｉｄｅー

－こそこそ－・・・今私は永琳の部屋に潜入しようとしてるわ

「まったくもう・・・私は勉強なんてしたくないって言ってるのに」

こうなったら永琳の弱みを握って勉強を無くすお願い（脅迫）しないと・・・

「ふ～、ここが永琳の部屋ね」

いつも部屋に入れてくれないから中がどうなってるのかわからないけど・・・あんだけ嫌がってたってことはなにかあるでしょう！

「ｰカチャリ・・・ｰ失礼しまーす・・・」

・・・よし、罠は無いわね？

「ｰゴソゴソｰん～、なにも見つからない～」

おかしいわ、私の感がなにかがあるって感じてるのに・・・

「ん～ｰゴソゴソｰむむ！ｰキュピンｰそこだ！」ｰガシッｰ

んー、なになに？これは日記かな？

〇月×日

今日は面白い妖怪を発見した。完全な人間型の妖怪だ。今まで鬼など人間に限りなく近い妖怪は発見されていたが完全なのは今回が始めてだ。だからはその妖怪にこれから色々実験させてもらう。

ふむふむ、永琳らしいわね

同日　夜

彼のことが気に入った！千夜と言う名前らしい。これから一緒の家に住むことになったから色々教えてあげようかしら？ふふふふふ・・・

えっ!?今の短い間になにが!?

○月×日（次の日）

彼が時々わからない言語を使うことを理解した。確か言ってたのは「最初から最後まで”くらいまっくす”だぜ!（逃走中）」とか「俺の好きな言葉は”ぱわーおぶじゃすてぃす”だ!（特訓室で雑魚敵相手に無双中）」とか所々にわからない単語がある。これを理解すれば千夜のことがもっとわかるはず・・・

ん～?最後がちょっと怪しいかな?

○月×日（何ヶ月か後）

千夜の言うことの状況と展開がわかってきた。でもそんなことよりなんで千夜は襲ってくれないのだろうか?結構誘ってるつもりなのだけどここまで何も無いと心配になってくる・・・

あれれ?

○月×日（千夜が町に出ることが許可されてからしばらく）

・・・・・・なによなによなによ!なんなの女どもの色目は!千夜は私のものなのに!こうなったら千夜に色目を使ったらその女を監禁して調教してあとあと・・・・・・（ここからは赤く染まって

いて見れない）

ーーーーーーーーーーーーーー

「ひいっ！」‐ばさっ‐

早くここから逃げないと！

「‐ダダダダ！‐・・・！‐ガチャガチャ！‐なんで扉が開かないのよ！」

どうしたら！「カグヤ？私の部屋でナにヲシてイルのカしら？」ひい！

「あ・・・あ・・・あ・・・‐ガクガクガク‐」

「ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩをしましょうか？」‐ズルズル‐

いやーーーー！

～回想終了～

「ということなのよ！」‐でん！‐

「完全に八つ当たりじゃねーか！」

それにしても・・・仲のよかった女性（見た目２４歳くらい）が突然引っ越したのって・・・・・‐ガタガタ‐

「まあそのことはもう気にしてないからいいわ」

「というかなんで俺がその千夜だってわかったんだ？」

今の回想では出てないはずなんだが？

「ああ、それは簡単に言うとその日記の最初の紙に千夜の詳しい情報と絵があったからよ」

そうだったのか・・・

「ふう・・・暇はつぶれたけど疲れたわ。そろそろ家に帰って寝るとしましょう」

「そうか、それじゃあ縁があればまたな」

「ええ、また会えたら会いましょう」－ザッザッ－

それじゃあ俺も帰るか

～藤原の家に到着～

「おいっすー、戻って「千夜ーーー！－ドーーン！－」ぐほっ！」

－ビターン！－

「なんで急に家からいなくなったのよ！」－ブンブン！－

「ちょっ、妹紅頭がヤバイからやめ・・・！」－ぐえっ－

翠はそこで見てないで止めてくれよ！

「・・・－ぼーー！－」

まだ回復してないのかよ！

「・・・ピタッ」

お？止まった？

「・・・今私じゃなくて翠のこと見てたでしょ」

え？

「なんで・・・なんで翠のことばっか見て私のことを見てくれないのよ！」ガッ

痛！妹紅に足の爪先でガッってされたんだけど！

「なんで！なんで！」ガッガッガッ

「痛い！痛いって！別に翠だけじゃなくてお前のこともちゃんと見てるし！」

「・・・／／／」プシュ～

「・・・／／／」プシュ～

あら？妹紅と翠が同時に顔を赤くして止まっちゃった

「こそこそ　ねえ翠」

「こそこそ　なんでしょうか妹紅様？」

「ここは私たちが争うよりも協力してこれ以上女を増やさないようにしたほうがよくない？」

「そうですね、妹紅様がよろしいならば私はそれで「私は貴方の意見が聞きたいの。ただ主の言うことを聞くだけの使用人なんて私はいらないわ！」ドン！」・・・はい！私はそれがいいです！」

「そう、ならばこれからもよろしくね？」

「はいっ！」

「・・・なんか俺の話題のはずなのに俺の関係が無いとこで話が進んでる気がする」

気のせいかな？それじゃまた次回～

ぐーやとの遭遇（後書き）

また次回～

日常？（前書き）

駄ぶ（ｒｙ　グダグ（ｒｙ　それでもいいという方だけどうぞ！

日常？

むい～、千夜なんだぞ～。今すごいダレてるとこなんだ～。最近なんかイベントがたくさんあったからね～。ああ、一人旅をしていた頃が懐かしい・・・

ーまだもこたんの家にきてから三日しかたっていてませんー

まあそんなことよりも今日はゆっくりするか「-スパーン！-千夜！旅の話をして！」・・・妹紅がきちまった

「今日はゆっくり寝てたいんだが・・・」

「えーー！そんなの私が暇だからいやよ！」

「は～、仕方ない。じゃあ少しだけ話てやろう」

めんどくさいな・・・

「「ワクワク」♪」

「うわっ！また翠が急に出てきた！」

しかもワクワクって言ってんのが棒読みだし！

「お気になさらず続きをどうぞ」

あ、ああ、そうだな・・・-ゲフン-あれは俺が一人旅をしていた頃の日常だったな・・・

～思い出～

「はあっ！」－バンバン！－

もっと！もっとだ！

「はあああああ！」－ババババ！－

うおおおお！

「ひゃっっっはーーーー☆」－バカーーーン！－

ふう、落ち着いた。え？何をしてたって？

［ぐおおお・・・］［ぎゃう・・・］［・・・］

ちょおっと実験をね☆

「この技は強いけど疲れすぎるな・・・」

ちなみに今回やってたのは、水爆弾は手で投げるからどうしても弾速が遅くなってしまう、ならば水で銃身を作って一つの水爆弾を火薬としてもう一つの水爆弾を弾にしてみたんだ☆それでそこら辺にいた妖怪に攻撃（爆撃）してみたら予想以上に威力が高かった。今までの水の銃は銃身の中にある弾を水で押し出すって感じだったからな

「それにしても・・・この打った感じはハマルな」－じ～ん－

ーテテテテッテテー！千夜は”トリガーハッピー”の称号をてにいれた！これから水の銃を使うと凶化する変わりに弾幕が強制的にルナティックモードになりますー

「おっと、この妖怪の血の臭いで新しい妖怪がくる前に逃げるか」

別に来たら殺せばいいんだが今は疲れてるからめんどくさい

「ｰタッタッタｰふう～、とりあえずここまでくれば大丈夫かな？」

さてどうするか、実験は終わっちまったし何もすることねえや・・・

「・・・暇だし修行でもするか」

～青年修行中・・・～

～一部抜粋～

ー水の剣ー

「まずは水の剣を練習するか」

今まで剣道すらやったこと無いからな。戦争の時は適当に振ってれば当たったし、なにより妖力に反応して自動追尾にしたからな。これから強い妖怪と会った時に自動追尾だけじゃ効かない奴が出てくるかもしれないしな

ー水の剣は自動追尾がありますが、それは追尾するだけで後は剣に鋭さ（切れ味）だけで斬っている。つまり触れるだけで斬っている状態ですー

「さて、素振りでもすればいいのかな？」

よしっ！物は試しだな！

「せいっ！ブン！はっ！ブン！」

～一時間後～

「・・・せい！ブン！はあ、ブン！」

～二時間後～

「・・・ブン！ブン！」

～三時間後～

「・・・飽きた」ぽいっ

どうしよう・・・お！そうだ！

「これなら！」

ーおや？どうやら千夜は何かを思いついたようですねー

「はあーー！九・頭・龍・閃！」ズパパパパーン！

はい！思いついたのは漫画・アニメのパクリでしたー！

ーちなみに今やった九頭龍閃は単に水の剣が9本に別れて斬っただ

けです。元ネタはるろ○に剣心ー

「正直我流はできる気がしないからな、いろんなとこから技を貰ってがんばるか」

じゃあ他の武器もそうすっかな

～水の銃～

「あーーっはっはっはーー！」ー バンバンバンバン！ー

ー千夜はスキル”トリガーハッピー”が発動したー

「ヒーーーーハーーーーー！」ー ダダダダダ！ー

ー千夜が暴走中のためしばらくお待ち下さいー

「はあ．．．はあ．．．」

あれ？なんでこんなに疲れてるんだ？

ースキル：トリガーハッピー（凶化）は強くなる代わりに体力をとても消費します。そして本人は凶化してることに気付いてません一

「ふう、疲れたが他のもやんないとな」

～水爆弾～

は特に無し

～水レーザー～

「・・・そういやこんな攻撃（レーザー）もあったな」

ー見直すまで忘れてました（＞人＜；）ー

「まあいいや、とりあえずレーザーも追尾するようにしようかな？」

～千夜レーザーの使い道を考え中・・・～

「ん～、そうだ！じゃあレーザーはマスパみたいにしようかな？」

ーさらに千夜の弾幕の鬼畜度がアップー

「だけどな～、あれじゃあ燃費が悪そうだしな～。どうしよ？」

ん～、そうだ！

「じゃあ拡散型のレーザーにしよう！」

上の方に一発マスパ並に太いのを発射して上空でレーザーが留まってそこからちょっとずつレーザーが降ってくる的な？

「とりあえずやってみるか」ｰ シュウウウウウ・・・ｰ

「はっ！」ｰ ドォン！ｰ

ｰゴオオオオ！・・・・・ｰ

「お、うまくできそうｰ ビビビビビ！ｰ な、なんだ！？」

-ブシャァァーー!-

「うわっ!これじゃあ無差別破壊兵器だよ!」

今な、上空に行ったのはいいんだが遠くなりすぎて水のコントロールが悪くなってな、当初の目的だったちょっとずつ降ってくるようにできなくてすごい量が降ってくるんだよ。まあレーザーだから軌道が真っ直ぐなのが不幸中の幸いかな?

ーそういうことなので千夜と弾幕ゴッコをやると千夜は強制的にルナティックモードになりますー

「まあレーザーはこれでいいだろ」

そろそろ疲れたし寝床を探して寝るか

~修行終了~

「-がさがさ-どこか寝れる場所無いかな~」

まあ別に水のバリアを張っとけばどこでも大丈夫な訳だが・・・そこら辺は気持ちの問題なんだよ。例え安全だとしても虫とかがワサワサしてる所で寝たく無いだろう?寝たい奴がいたらそれはただの変人だ

「ん~-がさがさ・・・-を?広い場所にでたな」

今居るのが何も無い草原だ

「ん～…ちらっ…・・・森の中で眠るよりかはいいか」

もうだいぶ暗くなってきたしな

「じゃあもう寝るか」…ふあ～…

お休み～

～思い出終了～

「と、旅の途中はずっとこんな感じですごい暇だったんだよな～。・・・ていうか妹紅はもう寝ちゃってるし」

「…ぐー・・・ぐー・・・…」

「すみませんが、妹紅様は話始めた頃にはもう寝ていました」

「早いなおい！そんなに寝たかったんなら最初から自室で寝てろよ！」

喋り損だよこのやろう！

「私は聴いておりましたので喋り損では無いかと。・・・半分以上理解できませんでしたが…ぼそっ…」

―まあ昔の人だからアニメの技とか修行の話とかされても意味がわかんないだろうしね？それに翠は色々と規格外だけどあくまで一般人だから―

「あ、そうか翠が居たんだよな。で？どうだった？俺の思い出は」

「・・・素敵だったと思いますよ？」

「・・・素敵に思えたのかよ」

昔の人の感性が俺にはわから無い

―いいえ、理解できて無いのでとりあえず素敵って言っただけです―

「まあいいや、妹紅が寝たし俺も寝るわ」

「はい。お休みなさいませ」-ぺこり-

「ん」

さて寝るか

～千夜睡眠中～

「-ぐー・・・ぐー・・・-」

「・・・妹紅様？」

「-ぴくん-・・・ぐ、ぐーぐー」

「わかりやすいですよ？」

「・・・何よ」

「お部屋に戻らないのですか？」

「・・・私はちょっとやることがあるから翠は仕事に戻っていいわよ？」

「・・・私もすることがありますので妹紅様はお部屋に戻って下さい」

「・・・翠？あなたは私の従者なんだから主人の気遣いを無下にしては駄目よ？」

「妹紅様に”言うことを聞くだけの使用人はいらない”と言われてしまったので」

「・・・あの翠が言うようになったじゃない・・・！」

「私は自分の意見を持ちましたので。だから言わせて貰います・・・抜け駆けは駄目ですよ？」

「くっ・・・-はあ-しょうがないわね、その代わり翠も抜け駆けしちゃ駄目だからね？」

「はい。・・・妹紅様」

「なに？」

「・・・やはり私は主人の言うことを聞くだけの従者の方がいいのでは無いかと思う「それはだ～め！私は今の翠の方が好きだわよ」・・・そうですか」

「じゃあ翠も一緒に寝ましょう！」

「えっ！・・・／／／千夜様とい、一緒にですか！？」

「そうよ？それ以外になにかあるかしら？」

「い、いえ・・では失礼します／／／」・ぽふん・

「あーー！主人より先に入ってるー！私もー」・ぽふん・

「／／／」・ぷしゅ～・

「♪」・ニコニコ・

～昼～

は～、よく寝た～。最近朝起きてまた寝るっていう二度寝が多くなってきたな。それじゃあ起きるか、よっ・・・・・ぐっ・・・すとん・あら？また起きれない。ってことはまた妹紅かなっと・ばさっ・

「・・・／／／（顔を赤くしながら幸せそうに寝ている翠）」

「ぶほっ！？」

なんで翠が俺の布団の中に入ってるんだよ！

「・もぞもぞ・千夜ー、うるさいわよー」

「ああ、すまん。じゃない！なんで翠がここに居るんだよ！」

「なによ～、翠がいちゃいけ無いって言うの～？」

いや、そういう訳じゃ無いんだが・・・

「・・・-はあ-いいや、それよりも昼飯はどうすんだ?」

「そんなの翠がいつもどうり作ってくれてるでしょ~?」

「・・・いや、その翠がここに居るから聞いてるんだが」

「・・・あっ!」

気付いてなかったな?

「・・・しょうがない、今回は俺が作るか」

「えっ!?」

なんだよ

「そんなに意外か?」

「・・・ええ」

「じゃあ作ってくるから待ってろ」

~青年調理中・・・~

「できたぞーー!」

「できたの?」

「申し訳ございません！お客様に料理をさせるなど！どうか私にお仕置きを！・・・お仕置き・・・どんなのなんでしょうか／／／」

―あれ？また変態増えた？―

「・・・いやお仕置きなんてするつもりは無いんだが」

なんか翠から悪寒がするんだが・・・'ぶるり'（最後のほうは聞こえてなかったようです）

「いえいえ！こんなことをさせてしまった私にどうか罰を！」''はぁっはぁっ／／／'

「翠が暴走してる！？しっかりしなさい！とりあえず食事が冷める前に食べるわよ！せっかく千夜が作ってくれたんだから！」

「千夜様の手作り・・・！そうですね、とりあえず食事をしましょう」'キリ'

・・・相変わらずこの家は切り替えが早いな

「'はあ・・・'翠は落ち着いたのか？まだ落ち着いてないようだったら翠は食べちゃ駄「落ち着きました！」・・・そうか」

キャラ崩か（ｒｙとりあえず食べるか

「「「いただきます！」」」

～食事中～

～食事終了～

「「ごちそうさまでした」」

ふう、食った食った。まあ相変わらず普通の飯だったけどな

「・・・ｏｒｚ」

「・・・なんで妹紅は落ち込んでんだ？」

見事に綺麗なｏｒｚのポーズだな

「妹紅様はお料理がまったくできませんのでお料理ができてしまった千夜様に対し”私もお料理できないと駄目かな？”と考えたのだと思います」

・・・なるほど、それで料理ができないという現実にぶつかってｏｒｚとなったのか

「こりゃどうしようもないな、とりあえず俺は散歩に行ってくるわ～」

「行ってらっしゃいませ」-ぺこり-

さて、今日もぐーやにエンカウントするのかな？一応不比等がぐーやの家に行ったみたいだし、不比等の様子見がてら会いに行くか。今竹取物語で言ったらどれくらい話が進んでるのか知りたいし

「よしっ！目的も決まったし行きますか！」

ぐーやの家にＧＯ！

日常？（後書き）

小説書き始めて毎日投稿してる人のすごさがわかった。・。・（ノД`）・。・。とてもじゃないけど俺には無理です。

それではまた次回～

千夜です・・・この時代の価値観がわからんとです・・・（前書き）

なんかして欲しいこと・ネタがあれば感想に書いて下さい！できるだけ努力します！

千夜です・・・この時代の価値観がわからんとです・・・

「あ～、この感じは五つの難題がでるところかな?」

よお、千夜だ。ただ今姿を隠して五人の公達が集まって何かを待っている所を見てる。このシーンは竹取物語でも有名なところだからわかる人も多いだろ?

「・・・暇だな～」

さっきからずっとこの状態でいつまでたってもかぐやがでてこないんだ

「・・・お?翁が出てきたな」

五人が姿勢を正してる。ということはかぐや登場か

「ん～、やっぱり姿は隠してるか」

なんて言えばいいんだろう?なんか簀の子型のカーテン的な?竹とかを細かく縦に裂いて隙間が無いように紐で一本ずつ繋げてるやつ。・・・名前がわかんね、まあいいや。それでかぐやの影しか見えない感じになってる

「・・・なんかかぐやに言われてるようだがこんなところだから聴き取れないな」

いる場所が５０ｍぐらい離れてる木の上だからな。見ることはできるがまったく聞こえない

「・・・お?終わったっぽいな。五人とも顔をしかめながら家から出てったぞ。・・・いや、不比等はそうでも無いな」

一見なんか考えてそうだがあれはなにも考えて無い顔だ

「・・・もしかして俺に任せるつもりか?」

いやいやそれはさすがに無いだろう

「・・・とりあえず不比等のところに行くか」

~合流中・・・~

「いたいた、おーい不比等ー!」

「お千夜。こんなとこまできていったいどうした?」

「ちょっと不比等のことが気になってなー」

「・・・私にそんな趣味は無いぞ?」-ズザザ-

「いや俺にもねーから!だから尻を隠しながら後ずさるな!」

「冗談だ」

またかこの野郎!不比等は真顔で冗談言うからシャレにならん;

「ああそうだ。千夜に聞きたいことがあるんだが・・・」

「・・・なんだ？」

やっぱり蓬莱の玉の枝のことかな？

「・・・かぐや姫に会ったことがあるか？」

・・・ほう

「なんでそう思ったんだ？」

「ふむ、当たりか。理由はこの家まで真っ直ぐきてたようだからな」

・・・なんだと

「一応気配は消してたつもりなんだがな」

「・・・いや、なにがと言うほどの訳でもないのだが」－ちらり－

ん？言葉を濁したな

「・・・気付いてなかったのか？」

「なにがだ？」

「・・・お前の後ろの方で妹紅が騒いでるぞ？」

・・・は？さっきから雑音が聞こえると思っていたんだが

－どうしよー翠ー、千夜見失っちゃったー！－妹紅様、千夜様はここまで真っ直ぐにきていたようですからこの先にあるなよたけのか

ぐや姫の所に行ったのかと‐‐・・・またあの女かー！まってなさい千夜！私が目を覚まさせてあげるわ！‐‐あまり無茶をなさらないようにお願いします‐

「あ～そういうことか」

「そういうことだ」

そりゃあんなに騒いでたらわかるか・・・あれ？

「じゃあ他の公達にも聞こえていたのか？」

「いや、私以外はかぐや姫に集中してて気付いた様子はなかったぞ」

「・・・よかった」‐はぁ～‐

覗いてたことがばれたら打ち首、良くてももうこの町にはこれないだろうからな

一豆知識：五人の公の名前は石作皇子（いしづくりのみこ）、車持皇子（くらもちのみこ）、右大臣の阿倍御主人（あべのみうし）、大納言の大伴御行（おおとものみゆき）、中納言の石上麻呂（いそのかみのまろ）で、そのうち車持皇子のモデルが藤原不比等と言われている。それがどうしたと思った人は先にＧＯ！ー

「千夜、正直に答えてほしい」

「なんだ？」

かぐやのことか？

「かぐや姫の姿が美しいのは直接会ったわけではないが雰囲気でなんとなくわかった。ならば中身はどうなんだ?その様子だと直接会って話ぐらいはしたのだろう?」

「・・・あまりオススメはできないと言っておこう」

「そうかそうか」-クックック-

「・・・なんなんだよおい、その笑い方は気持ち悪いんだが」

オススメはできないって言ったからさらに興味がでちまったのかな?

「いやなに、つまりは中身は綺麗ではないということだろう?そんなこと言われたら余計見たくなってしまうではないか!」-ババーン!-

やっぱりか、ここで中身も美しいとかありきたりなことを言えば興味がなくなったかもしれないのに、選択をミスったな・・・

ーようするに怖いもの見たさですね?自分もよくありますー

「そうか・・・なら蓬莱の玉の枝をどうにかして準備しないとな。千夜!なにか方法はないか?」

「ん~それはな~」

都市に居たころは普通の宝石店で売ってたんだけどな。まあそれは蓬莱の玉の枝に似せて作った宝石で出来た偽物なんだけどな

ー蓬莱の玉の枝は、蓬莱山にある金の根と銀の茎で白い玉の実がな

る木の枝のことである。また、東方の輝夜は本物を所持している。
理由は後で一

「・・・どうするかな」

「わからないならそれでよい。自分で考えよう」

「偽物を作るでは駄目なのか？」

「そんな物では意味が無いだろう？」

どういうことだ？確か竹取物語の車持皇子（不比等）は偽物を作らせてそれを持っていったんじゃなかったっけ？

「そんなことして会ってもつまらないだろう？どんな困難でも打ち破って会ってやるさ！」

「困難を打ち破れなかったらどうするんだ？」

会えなかったら今までの苦労が水の泡だぞ？

「そのときは私がそれだけの男だったってだけさ」

・・・無駄に男らしいな

「そうか、ならどうすんだ？本物の蓬莱の玉の枝なんて存在すんのかもわからないんだぞ？」

「大丈夫だ。一応あてはある」

「・・・ならなんで俺に知ってるか聴いたんだよ」

最初から俺に聞く必要ねえじゃねえか・・・

「なに、確実にあるのならそっちを優先したほうがいいだろ?あてがあると言っても絶対あるという保証は無いからな」

「なるほど。で?そのあてっていうのは?」

蓬莱の玉の枝があるかもしれないあてってなんだ?

「それはな・・・」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

'おおーっと!この商品の値段はなんと・・・'''買ったー!'''それは俺のだー!'''かゆ・・・うま・・・'''ちょっ!噛み付くな!'''ワーワーギャーギャー!'

「ここだ!」'ドヤッ'

「ただのオークションじゃねえかよ!」

ドヤ顔うぜえ!しかも客の中に明らかに危ない奴がいたし!

「ここは本当にいろんな物が売り出されるんだぞ?」

「いやっ!確かにそうだろうけど伝説の物がこんなところにあるわけがなっ!」

'おおーっと!この商品はすごいぞ!海外から流れてきたもので名前は”竜玉”と言うらしいです!この玉の特徴は玉の中に星の模様があり、7つ集めると願い事が叶うとか・・・''今度こそ俺がー!''うるせい!俺が買ったー!''かゆ・・・うま・・・''あ”ーあ”ー'

なんでドラゴ◯ボールがあんだよ!しかもやばい奴が増殖してるし!

「ん?玉系の商品がでてきたってことはそろそろか・・・」

「そんな!?・・・はあ、もう驚くのが疲れたよ・・・」

もうなにもかもがめんどくさい・・・

'次の商品はこちら!・・・特に特徴らしき特徴もない普通の＞蓬莱の玉の枝＜です'なーんだ。ならいいや''う〜ん、俺もちょっとな〜''かゆ(ry''あ”(ry''うわー!何時の間にかに妖怪がいるー!'

いやいや普通って、伝説の物だぞ?そして気付くのが遅い!

「ふむ・・・'スッ'なら私が買おう」

'おおーっと!ここでまさかの不比等様の登場だー!お買い上げありがとうございます!''おおー、不比等様がいる''おーい!不比等様ー!''か(ry

「・・・皆ノリが軽いな」

「私はよくここにきているからな。あるていどは人付き合いがある

んだよ」

「・・・お前そんなんでいいのかよ」

一応貴族だろ？

「ふむ、そんなこと気にしてはいけないぞ？」

「まあ・・・お前がいいなら別にいいんだが・・・」

人の性格に文句を言っちゃいけないな。うん

「それよりも蓬莱の玉の枝は手に入ったんだ。今日はもう寝て期日を待とう」

「それもそうだな」

なんか疲れたしゆっくり寝るか

「ん？・・・なんか忘れてるよ～な・・・」

あ・・・妹紅達を忘れてた

ーーーーーーーーーーーーーー

「あーー！千夜が帰ってきたーー！」

「おかえりなさいませ。不比等様、千夜様。」

「ああただいま」

「俺客人だけどただいまでいいのかな?・・・まあいいや、ただいま」

「それよりも千夜!あのかぐや姫に求婚する気ならやめなさい!あの女は絶対にいい女ではないわ!」

いや求婚する気ないし

「なんでそんなにはっきりといい女じゃないって言い切れるんだ?」

「女の感よ!」-ドン!-

「・・・そーですか」

俺には女がわからないんだぜ・・・

「いいんだけどよ、かぐや姫に求婚する気なんざ無いぜ?」

「え?」

「・・・なにを勘違いしてるのやら」-はぁ-

素を知っている俺としては間違ってもぐーやとは結婚したく無いな。

容姿だけはいいんだけどな、容姿だけは・・・

「あ・・・あはははは!そうよね!千夜ならわかってると思ってたわ!」

「・・・なあ翠」

「なんでしょうか千夜様」

「なんで妹紅はあんなに喜んでるんだ？」

「それは「そのことは私が説明しよう」・・・」

「不比等、いたのか？」

もうすでに自室に行ったのかと思ったぜ

「最初からいたわ。まあいい、多分妹紅はお前がかぐや姫に盗られる（泥棒猫的な意味で）とでも思ってたんじゃないか？」

「盗られる？別にかぐや姫に盗られる（普通の泥棒的な意味で）ような物はないんだが？」

あのお姫様が庶民の俺からなにを盗むと言うのだ？

「（これは・・・誤解釈してる顔だな）私がかぐや姫に夢中で妹紅の相手をしてやれなかったからな、お前もそうなるんじゃないか？って心配してたんだろうよ」

「・・・あ～、そういうことね」

ならばやることは一つだな

「あはははは‐ポン‐ふえ？」

‐なでなで‐

「せせせ千夜／／／！？なにをしてるの！」

「いやなに、そんな心配をしていた妹紅が可愛いなー、と」ｰなでなでｰ

「・・・あううぅぅ～～／／／」ｰプシュ～ｰ

おっと、妹紅が倒れちまったな。妹紅の部屋まで運ぶか「千夜様、妹紅様をお渡し下さい・・・！」ｰゴゴゴゴゴ・・・！ｰ

「うおっ！翠はなんでそんなに怒ってるんだよ！」

「・・・怒ってませんよ？ええ、完璧な従者である私が怒るわけがありません。ありえません。」ｰズズズズ・・・ｰ

いや絶対怒ってるって！さっきのｰゴゴゴゴゴｰでできた地面の亀裂からなにかが出てきそうだし！

「千夜！こうすれば翠が止まるぞ？ｰごにょごにょｰ」

「・・・そんな方法で止まるのか？」

俺にはとても止まりそうな気がしないんだが・・・

「ああやってみろ。絶対止まるって」

・・・仕方ない、やってみるか

「止まれって、翠」ｰギュッｰ

「ふあっ／／／」

お？止まったでいいのかな？ただ抱きついただけなんだがな・・・

「・・・むきゅ／／／」・がくん・

「翠！？・・・気絶しちまった」

「・・・さーてと、私はもう寝よう」

「ちょっと待てや！お願いだからこんなカオスな状況で一人にしないで～！」

「ううううう～／／／」

「むきゅ～～／／／」

・・・それではまた次回とかっ！（現実逃避）

千夜です．．．この時代の価値観がわからんとです．．．（後書き）

それじゃあーまた次回～

に～ち～じょ～お～（前書き）

うれしい感想をいただきました！ありがとうございます！

こんな小説でも需要があることに驚きましたｗ

それではどうぞ！

に～ち～じょ～お～

よお・・・千夜なんだぜ・・・　あの後妹紅と翠をそれぞれの部屋に運んだはずなんだが・・・

「ｰぐーぐーｰ」

「ｰすーすーｰ」

「・・・ｰはぁｰ」

なんでまた二人が俺の布団に潜り込んでるんだ・・・

「・・・せっかく運んでやったのにこれじゃあ意味がねえじゃねえか」

―けしからんとかじゃなくてそっち（運んでやったのに）なんですね？―

「ったくもう、とりあえず二人を起こすか」

「おーい！朝だぞー！二人とも起きろー！」ｰゆさゆさｰ

「・・・んー？」ｰもぞもぞｰ

「ｰすーすーｰ」

・・・これは驚いた。翠より先に妹紅が起きるとは

「・・・せんや～？いましつれいなことかんがえた～？」

「いやいや俺のログにそんな記録は無い」

「・・・？、ならいいや～」・ふぁ～・

やべえ、寝ぼけてる妹紅が純粋すぎて俺が汚く思える

「もう朝だぞー、いいかげん起きろ！今起きないと口付けしちまうぞ！」

「「・・・」」

これなら二人とも嫌がって起きてくるだろ・ドヤッ・

「ぐ、ぐーぐー／／／」

「・・・すー／／／」・すー・

「おい妹紅！お前は起きてただろ！翠！さりげなく口をこっちに近づけるな！」

え？普通は嫌がるもんじゃないの！？・・・ああ、今は昔だから俺の常識が通用しないこともある。つまり、この昔では常識に囚われてはいけないのですね！

ー千夜暴走中。どっかの脇巫女２Ｐのようなセリフを言っております一

「・・・早く起きないと朝飯抜きにするｚ「「起きた（ました）！」

」・・・」

・・・もういいや

「ふぅ～、じゃあ朝飯でも作るか」

翠が作らないのか?って思ったやついるだろ?それはな、前に作ったことがあったろ?その時に妹紅と翠の二人に「たまにでいいからまた作って」って言われたんだよ。だから今回は俺が作ることにした

「わーい♪千夜の作ったご飯だー♪」

「・・・（ちょっと複雑ですね・・・）」

ーまあそりゃ今まで妹紅に自分が作ってたのにいきなり現れた千夜に（たまにとはいえ）出番を取られてしまったら複雑でしょうねー

「・・・まあ千夜様のご飯が食べられるならまったく構いませんけどね♪」

ー・・・どうやらまったく心配は必要無いようです。ー

「よし、じゃあ作るか」

～青年調理中・・・～

「で「「できたのね（のですね）！」」・・・なんで後ろにいるんだよ」

ビックリしたわ！

「そんなことより運んで食べましょう！」

「それでは私は不比等様を起こしてまいります」‐ぺこり‐

あ、不比等のこと忘れてた；

「ああ頼む。」

「・・・（千夜様が私に頼みごとをしてくれました／／／）はいっ！まかして下さい！」

「・・・なんだろう？」

やけに気合が入ってるな・・・それが空回りしそうで怖いぜ

「（よしっ！行きま）‐ガッ！‐えっ？‐ひゅうぅぅ・・・‐きゃーー！‐ぺしゃっ‐あうぅぅーー・・・」

「あーあ・・・」

襖の段差に足引っ掛けてころんじゃったよ。もしかして翠って意外とドジっ娘？

ーピロリロリン♪翠はドジッ娘？の称号を手に入れた！称号説明：ドジっ子？いいえドジッ娘です！ー

「あぅぅー／／／」‐ふらふら‐

「翠大丈夫かしらね？」

「・・・大丈夫だろ」

あれでも今までこの屋敷を一人で支えてきたんだからこのくらいなんの問題も無いはず

「よしっ、今度こ-ガスン!-うみゃっ!-ゴスン!-うみゅっ!-ビターン!-ううぅぅーー・・・」

大丈夫・・・だよな?

「なあ妹紅」

「なに?」

「本当に今まで翠一人だけでやってたのか?」

とてもじゃないが今の翠を見てると無理そうなんだが・・・

「そうよ?(でも千夜がくる前は怖いくらい正確で無表情だったのに。本当、恋って人を変えるのね~♪)」

そうか・・・

「まあ今はそんなことより料理を運びましょ♪」

「やけに上機嫌だな」

なんか嬉しいことでもあったのか?

「そう?そうね、私は今がとても幸せだわ・・・（そう、それが無理だとわかってもこんな日常が一生続きますようにって願ってしまうくらいには・・・）」

「?、微妙に話がずれてる気がするんだが。まあいい、運ぼうか」

早くしないとせっかく作った料理がさめてしまう

「そうね♪」

～青年少女運搬中・・・～

「不比等様を呼んでまいりました」

「' ふぁ～' ・・・二人ともおはよう。今日は千夜が朝飯を作ったらしいな?美味い飯を期待してるぞ」

「ん～、あまり期待されてもな～」

そんなすごい美味いってわけでもないし

「まあいい、それじゃあ全員で・・・」

「「「「いただきます!」」」」

～食事中・・・～

～終了～

「' ずずずず・・・ことん' ふむ、なかなか美味かったぞ。」

「そうか？ありがとう」

「どうお父様？千夜の飯は美味いでしょう！」

いやいやなんで妹紅が威張ってるんだ？

「－ひそひそ－それは不比等様が『美味いと言っても普通だろ？』とおっしゃったからです」

「・・・何時の間に俺が料理を作った話をしたんだ？」

すくなくとも俺は言ってないんだぞ？

「千夜様が寝ている間にです。」

「・・・そうか」

「それでは今日はどうするのだ？私は特にないから寝て「不比等様？仕事が溜まっております」・・・・私は自室で仕事しておる。なにか用があればきてくれ」－スッ、スタスタ－

そりゃな、今までぐーやのところに通ってたからな。仕事の量がすごいことになってそうだな・・・

「・・・がんばれ不比等、骨は拾ってやる－ぼそっ－」

「千夜はどうするの？私は翠の手伝いで家事をしてるわ」

「妹紅って家事の手伝いしてたのか？」

てっきり全部翠がやってるのかと思ってたんだが

「はい。最近始めて、千夜様が振り向いてくれるようにと「たまたまよっ！たまたましたくなっただけよ／／／！」・・・だそうです」

－クスクス－

？そうか

「なら俺は散歩に行ってこようかな？」

「行ってらっしゃいませ」－ぺこり－

「行ってらっしゃーい」

じゃあ行くか

～青年散歩中・・・～

ー町中での会話ー

ーー家具屋ーー

「ああー！強盗だー！」

「なんだと！？」

どこだ！

「・・・ああすまん、ありゃわしの妻じゃった」

「おいその奥さん商品を持ってってるぞ！しかも一つの棚にあった物全部！」

ー商売になってんのかな？ー

「すぐ飽きて売るから大丈夫じゃ」

「・・・そうか」

ーー魚屋ーー

「ここはなにもなさそう、っておい！」

「なにか用かの？」

「お前さっきの家具屋だろ！」

二つの店を持ってるのか？いやそれよりも見た目ただのおじいちゃんなのに何時の間にかに追い越された！？一本道をここまで真っ直ぐ歩いてたから他の道もないし・・・

「家具屋はわしの弟じゃよ」

「ああ・・・そういうことか」

ーー肉屋ーー

「へーいらっしゃいらっしゃい！そこの目の前にある腐った肉屋よりこっちのほうが安いよー！」

「なんだとごらぁ！お客さん！こっちの店はあそこの屑みたいな肉よりこっちの肉のほうが美味いよ！」

「んだと！」

「やるかごるぁ！」

「「死ねーー！！」」

「・・・」

いやいや周り皆引いてるから；

～ぐーや～

「いやお前なんで町中に普通にいるんだよ！」

「いちゃ悪いの！」

「屋敷で爺さん婆さんが心配してるだろうよ！」

「ああ、それなら問題無いわ。身代りは置いてあるから」

身代り？

「そんなのすぐバレるだろ・・・」

「・・・都市の技術ってすごいわよね～」

・・・ようするに未来技術でなんとかしちゃった訳ね

「ということは今使っている眼鏡も都市製か」

認識阻害的な?

「・・・本当にすごいわよね～」

本当にな・・・

～散歩終了～

町中でぐーやに会ったのは驚いたぜ

「それよりも私の家にきてみる?っていうかこい」-ぐいっ-

「なんでだよ、あんまり行きたくないんだが」

俺の勘がめんどくさいことになるって告げてるんだぜ!

「暇だから私の話し相手になりなさい」

「やっぱりめんどくさいことだな・・・」

「めんどくさいってなによ!こんな美人と会話できるんだから泣いて喜びなさいよ!」

「お前は美人(笑)だしな～」

普通の美人なら喜んで話し相手になったんだけどな・・・

「美人に変わりないから大丈夫よ」

「・・・もういいや、俺をどこにでも連れて行け」-はぁ・・・-

「じゃあうちまで連れてくわ♪」-ぐいっ、スタスタ-

「・・・手離せよ」-スタスタ-

~ぐーやの部屋~

「さあ、私にあなたの今までやってきたことを話なさい！」-キラキラ*

「いや、なんでそんなに興味津々なんだよ」

「月では妖怪大戦（第１０部参照）は有名だからね、その大戦以降のあなたの軌跡を知りたいのよ！」

「そんなに有名なのか？」

「ええ、あの大戦はテレビ中継してたわよ？途中から電波が悪くなって無理だったけど。電波が直った時には大きな爆発後があっただけで人も妖怪も見当たらなかったのよ」

ああー、俺と剛鬼の妖力で結構荒れてたしな。俺が見当たらなかったのは剛鬼と戦ってたときに吹っ飛ばしたり吹っ飛ばされたりして都市から離れてたしな。最後の都市破壊は遠隔操作でやったし。その分余計に疲れたけどな

「そんなことよりなにがあったか教えてよ！」

「ああ、あの頃の話をしてやろう・・・」

色々あったよなぁ・・・

～千夜の記憶～

ー前略ー

あの時はさすがの俺も死を覚悟したね、だってあれは・・・

ー後略ー

～終了～

「・・・っていうことがあったんだ」

「すごい・・・そんなことがあったなんて・・・！」

ん？略したところが気になるって？それは大人の事情ってやつだよ

「ふぁ～、そろそろ暗くなってきたし帰ってもいいわよ？」

「なんで上から目線なんだよ、帰るけどな」

早く帰らないと妹紅、翠が心配する。不比等はまったくしないどろうが

「じゃあな」- ひらひら-

「ええ、またね」-ぶんぶん-

よし帰ろう

～藤原家～

「帰ったぞー」

「あ、千夜だ。お帰り～」

「千夜様、お帰りなさいませ」-ぺこり-

「おう、不比等は？」

「もうお休みになっております」

やっぱりか

「じゃあ俺も疲れたしもう寝るわ」-スタスタ-

「お休みなさいませ」-ぺこり-

「お休み～」

今日はもう寝よっと。じゃあな～

に～ち～じょ～お～（後書き）

かた次回～

どーしてこうなった～♪（前書き）

誤字脱字がありましたら言ってください！

どーしてこうなった〜♪

千夜だぜ！ただ今俺がいる場所は・・・

「これが”仏の御石の鉢”です」－ごとん・・・

「どうなのじゃ？かぐや姫よ」

そう、ぐーやの家の中です。しかも持ってきた宝を提出するところ。
・・・俺は不比等に無理矢理連れてこられた

「お爺様、それは偽物です。」

「なっ！？なんで偽物だとわかったんだ！？」

「あなたが今自分で偽物だと言ったからです」

「しまっ・・・－ぽいっ－それよりも私の妻になるといいことがあるぞ？例えばだな・・・」

「しつこいです」

－ガシッ－

「なんだお前ら！私を誰だと思っておる！」－ぎゃーぎゃー！－

あーあ、しつこすぎてこの家の護衛してる人につれていかれちゃった

ーこの嘘がばれて、鉢を捨てて言い寄ったことから面目ないことを

”はぢを捨てる（恥を捨てる）”と言うようになった―

「次の方」

「私はこの”蓬莱の玉の枝”を持ってまいりました。」‐ことん‐

「おおっ、これは！かぐや姫よ、これは本物ではないかの？」

「・・・！（えっ？ちょっと待ってよ！私は絶対に結婚したくないから噂で聞いたことがあるあきらかに存在しないような物を選んだのに！）」

「どうなのですか？かぐや姫よ」‐ドヤッ‐

いやいやお前オークションで買っただけだろうが、ドヤ顔すんな

「・・・でもこれは本物っぽいし・・・まさか不比等とかぐやが結婚しちまうのかな？‐ぼそっ‐」

まさかこんなところで（東方と竹取物語の）原作ブレイク？

「・・・それではかぐや姫の婿は「ちょっと待ってくれい！」曲者か！？」

・・・なんか職人風の男が出てきたよ

「それはおいらが作ったものだぜい！（しっしっし！蓬莱の玉の枝だか上海の玉の枝だか知らないが、こう言っておけばかぐや姫からご褒美が貰えるだろうよ！ああ・・・俺ってなんて天才なんだ・・・！）」

「・・・？お主は誰だ？私はしっかりと本物を買ってきたんだぞ？」

「（そうなのか？だったらこう言い返すぜ！）そのお前に売った商人に売ったのがおいらなんだよ！」

「・・・いや、買ったのは集団売買所だから商人ではないんだが」

「それは・・・！」

さて、どう答える？

「そ、そうだ！間違えた！その集団売買所に売ったんだよ！」

言い訳がきついな・・・

「じゃあその場所の名前を言ってみろ」

あ、詰んだ

「それは・・・！そ、そんなことよりあの玉の枝はおいらが作ったんだよ！だからなにかご褒美をくれ！」

「・・・。」

さて、ぐーやはどう判断するのかな？

「・・・そうですね、そこの職人には後でご褒美を授けましょう。不比等様には悪いですが本物か偽物かわからぬ物では仕方ありません（本当はこんな屑みたいな男が嘘を言って褒美を貰おうとしてる

のはわかってるけど、今回はそれを利用させて貰うわ）」

「・・・そうですか。でもそれはかぐや姫に差し上げます」

「・・・ええ、大事にさせて頂きます」

残念だったな。あの男は後で１０分の９殺しにして妖怪の前に置いとこう・・・

「それでは気を取り直して、私が持ってきたのは・・・」

ーそんな感じで話は進んで行きー

・・・ふー！やっと終わったよ！結局本物の宝を持ってこれた奴はいなかったな

「残念だったな不比等、こんな結果になっちゃって」

ちなみにあの男はきっかり１０分の９殺しにして妖怪の前に置いてきたぜ！どうなったかは知らん（黒笑）

「いや、私は会いたいだけだからな。まだ方法はある」

「・・・前向きだねえ」

少なくとも俺だったら怒り狂うな

「しかしその時を待たないといけないからしばらくは暇だな・・・」

「仕事はいいのか？」

「あんな物この前に部屋でやった時に一週間分終わらせたわ」

早いなおい

「じゃあとりあえず家に帰ろうぜ」

「そうだな、帰って寝るか」

よし！じゃあ帰るか！

～藤原家～

「「ただいまー」」

「お父様、千夜、お帰りなさい」・ニコッ・

「不比等様、千夜様、お帰りなさいませ」・ぺこり・

「なんか妹紅の対応が柔らかいな」

なんかあったのか？

「・・・そう？私はいつもこんな感じ「千夜様は優しい方のほうが好きかなと妹紅様が言って」わー！わー！／／／」

「なんだ翠？よく聞こえなかったんだが「千夜は気にしなくていいのよ！／／／」そ、そうか」

少し気になるけど・・・ま、いっか

「翠よ、夕飯はもうできておるか？」

「はい不比等様、御夕飯はもうできております」

「それではぱっぱっと食って寝るとしよう」

「そうだな」

「承知しました。それではもう準備はできておりますので食べましょう」

「そうね、私もそろそろお腹が空いてきたわね」

「よしっ！じゃあ食いましょうか！」

～食事中・・・～

～終了～

感想：翠の作った飯は普通に美味しかったです。

「ごちそうさま」

「うむ、いつも道理に美味しかったぞ」

「美味しかったわよ～」

「お粗末様です」

んじゃ、寝るとしますか

「お休み～」ｰスタスタｰ

「ああ千夜、また明日」ｰスッスッｰ

「お父様～千夜～、お休み～」ｰテクテクｰ

「お休みなさいませ、皆様」ｰぺこりｰ

じゃあ客室に戻ろうか

～千夜の部屋（客室）～

「よ～し、寝るか！」

と、その前に・・・

「・・・なんでついてきてるんだ？妹紅」

「・・・ｰビクン！ｰに、にゃ～」

「なんだ、猫か・・・って騙されるわけねえだろ！」ｰヒュンッｰ

「ｰスコーンｰあ痛っ！」

そこら辺で拾った石を投げたら見事に命中したぜ！

「なにすんのよ！これで傷ができたら責任取ってもらうからね！」

「責任って・・・なにすればいいんだよ」

そんなこと言われても困るんだが・・・

「えっ／／／それは・・・その／／／」ｰもじもじｰ

何をやらせる気だよ！？

「死ねとかそういうのは駄目な」

だって俺死ねないし

「そんなこと言うわけないじゃない！・・・ただちょっと大人なことをして貰おうかな～って・・・／／／駄目？」ｰうるうる・・・ｰ

うおい！涙目で上目遣いとか・・・／／／やべえ、すっげえ可愛い。こりゃけーねもああなるわけだ・・・でもな～

「大人なことってなんだ？」

そう、それがまったくわからない

「・・・え？」ｰカチンｰ

あ、固まった

～妹紅視点～

予想外だわっ！断られるとは思っていたけどまさか言葉の意味を理解してくれないなんて！

「えーっと、あの・・・その・・・ねえ／／／？」

駄目だわ・・・さすがに言葉にしてあんなことを言うなんて・・・／／／考えただけでも顔が赤くなって爆発しそうなのに／／／

「・・・？風邪なら早く寝ろよ？」

無理だわよ！せっかく勇気を出して今夜こそは！って思ったのに・・・なんでこんなに気持ちが伝わらないんだろう？こうなったら強硬手段しか・・・

「・・・？（なにを悩んでるんだ？このままほって置くと大変なことになるって俺の勘が言ってるからとりあえず・・・）今日は一緒に寝るか？」

え？・・・千夜から誘ってくれた！？

「－シュバッ！－寝る寝る！」

「うおっと、いきなり元気になったな。じゃあ寝るか」

やったーー！

ーどうやらさっきまで悩んでたことはすっかり忘れたようです。こんな調子では千夜と（Ｒ１８的な意味で）寝るのはいるになるのやら・・・まあ妹紅は良くも悪くもまだ子供というわけですねー

「お休みな、妹紅。」

「お休み♪千夜」

今日は気持ちよく寝れそうだわ♪

～千夜視点～

「-くー、くー、-」

「・・・すぐ寝たな」

やれやれ、あのお願いは一体なんだったのやら

「やっぱり寝顔は可愛いもだな・・・」

別に起きてる顔が悪いってわけじゃないぜ？でも寝顔はもっとこう・・・神秘的な？なんかそんな感じがするんだよ

「・・・っと、寝顔ばっか見てないで俺も寝るか」

それじゃお休み～

～次の日～

・・・ふぁ～、

「あ～、よく寝た～」

さて、妹紅はまだ寝てるようだし俺は起きるか

「よいしょっと・・・ん？」

ああー、なんか右側の布団がやけに暖かいな（妹紅は左側にいる）。
こりゃ翠も侵入してたか？

「ま、なんの証拠も無いしどうでもいっか」

にしてもなんで妹紅と翠は俺の布団の中に入りたがるかねえ・・・
俺からマイナスイオンでもでてんのか？

「とりあえず目覚ましてこよう・・・」

～青年移動中・・・～

ーー外ーー

外に出た理由は能力を使ってるとこを見られないようになんだぜ！
まあ妹紅、翠、不比等はまったく気にしないだろうがな

「-パシャーン-ふうっ、やっぱり顔を洗うと目がすっきりするな」

でも冬は勘弁な、あれはきつい

ーこの時代って井戸ってありましたっけ？ー

「さてと、目が覚めたし妹紅を起こして朝飯食いに行きますか」

じゃあレッツラGO！

～青年移動中・・・～

「おーい！妹紅起きろー！」－ゆさゆさ－

「・・・はにゃ～ん」－ごろごろ－

「・・・－プシュッ－お～い、妹紅起きろ～」－ポタポタ－

やべっ、不意打ちくらって鼻血が出ちった

「うにゅ～？あ～せんやだ～」－にへら－

「・・・－プシャーー・・・－」

あああああああああああああ（ｒｙ

－千夜暴走中によりしばらくお待ち下さい－

・・・ふぅ、落ち着いたぜ。え？鼻血はどうしたって？俺の能力を思い出してみ？最近まともに使って無いけど一応すごい能力なんだぜ？鼻血を掃除すんのなんてあっという間さ！

－これぞまさしく能力の無駄使い－

「ん～－ごしごし－ふぁ～、目が覚めたわ」

「やっとか」

「私は朝が弱いのよ・・・って千夜大丈夫！？顔が真っ青なんだけど！」

ありゃ？少し血を流しすぎたかな？頭が少しぼ～っとしてきたぜ・・

・

「すまない・・・妹紅、後はまかせた・・・」-ガクッ-

「えっ、千夜ーー!死んじゃいやーー!」-わ~ん!-

くそっ、俺はまた誰も守れなかったか・・・ははっ、かっこ悪いな・・・

ー注意:シリアスではありませんー

「なによっ!なにが一体千夜をこういう風にしたのよ!」?あなたです

「・・・」

「千夜ーー!」

「・・・なに?」

「あれっ?」-ガクッ-

ううー、頭がクラクラするんだぜ

「大丈夫なの?千夜」

「ああ、でも鉄分を補給しないとやばい・・・」

不老不死でも体の調子はどうしようも無いからな、これぐらいなら一回木っ端微塵に死ねば体も再構成されるから治るんだが・・・さ

すがにそんな確実に妹紅のトラウマになるようなことしたくないし・・・なにより俺が痛いし・・・

「鉄分!?鉄分ってなによ!」

あ、さすがにわかんないか

「・・・とりあえず食事をすればいいってことだよ」

「わかったわ!じゃあ朝飯持ってくるからここで待ってなさい!」

'ドタドタ・・・'

ありゃりゃ、妹紅は相変わらず行動派だねえ

「あ~、でもあんまり動きたくないから助かったな」

まあこうなった原因も妹紅だけどね

「まあそりゃ妹紅の可愛いさに負けた俺の自業自得ってことで」

次回までには回復しますか、それではじゃあね~ノシ

どーしてこうなった～♪（後書き）

んじゃあまた次回～

もこたんな一日（前書き）

閑話です。スルーしても問題ありません。

ほとんど妹紅視点

今回は少し短いぜ！

もこたんな一日

千夜だ（ｒｙ、最近あいさつすんのがめんどくさくなってきた・・・

「ん～」－もきゅもきゅ－

「どうなの千夜？もう大丈夫なの？」－はらはら－

ああ～、なんか不謹慎だけど涙目で心配してくれる妹紅に癒される・・・

「ん、もう大丈夫」

そんなに速く血ができるわけないんだがこれ以上妹紅に心配をかけるわけにはいかん。

「そう？」－ほっ－

「－もきゅもきゅ・・・－よし、ごちそうさま」

今日も美味しかったですよっと

「じゃあ散歩でも「絶対駄目！」・・・もう大丈夫だって」

「それでも今日ぐらいは安静にしてなさい！」

ありゃりゃ、こりゃ本気で心配させちまったかな？

「とりあえず今日は散歩もなにも駄目！」

「・・・は～い」

まあ今日ぐらいはしょうがないかな?・・・いや、暇だな

～妹紅視点～

もう!なにが原因かわかってないのに散歩に行こうとするなんて!・・・まあなにが原因でああなってしまったのか千夜はわかってたみたいだけど・・・

「まあいいわ、客室に戻って寝てなさい。」

「・・・わかった(隙をみて脱出しよっと)」

「・・・ついでに千夜」

ちょっと釘刺さないとね

「なんだ?」

「・・・もし、私が見に行った時に客室にいなかったら・・・」

「な、なんだ?(すっげえ嫌な予感がする;)」

ちょっと、ほんのちょっとよ?(黒笑)

「・・・あなたの男の勲章、踏み潰すからねえ?」-ヒュオオオ・・・-

「-ブルッ!-イ、イエス・サー!」-ビシッ!-

ふう・・・翠に千夜を止める方法を聞いといてよかったわ。ところで男の勲章ってなんなんだろ?

ーどうやら情報源は翠のようですー

「じゃあ自分の部屋で大人しくしててね?」

「あ・・・うん、わかった・・・(暇なんだよ!抜け出してえよ!でもそれ以上に妹紅が怖いんだよ!【マジ泣】)」

あら?急に千夜が大人しくなったわ、翠が言ってたことは本当だったのね♪これからも使おっと♪

ーそれは勘弁してやって下さい、千夜が不憫すぎる。(((((;゜Д゜)))))ー

「そ、それじゃあ部屋に戻ってるわ!」-シュバッ!-

「ええ、またお昼に行くからいなきゃ駄目よ~」

聞こえてるかしら?まあいいわ、翠の手伝いをして家事を覚えないと・・・将来は千夜と静かなところで二人暮らしを・・・///二人っきりになったら・・・///

ー乙女(妹紅)暴走(妄想)中・・・ー

はっ、早く翠のところに行かないと!

～少女移動中・・・・～

「翠ー！いるー？」

あ、いたいた

「なんでしょうか妹紅様？」

「今日もなにか手伝うことある？」

「・・・そうですね、なら洗濯物を干すのを手伝ってもらってよろしいでしょうか？」

「ええ！まっかせなさい！」

今日も頑張るわよ！

～妹紅仕事中～

～ハプニング集～

「これを干せばいいのね？」

「はい。しかしそれはとても滑りやすい着物ですので気をつけないと「きゃあっ！」バサッ・・・」・・・洗濯し直しですね」

あううう～、ごめんなさい～

ーー掃除ーー

「よいしょっ、よいしょっ」- ふきふき-

ーただ今雑巾掛け中ー

「妹紅様、雑巾掛けはこういう風にやるのですよ?」- ふきっ、ふきっ-

へ〜、後ろに下がりながら少しずつ前を拭くんだ・・・

「よしっ、私も」- ふきっ、ふきっ-

「あ、妹紅様、慣れないうちに勢いよくやってしまうと・・・」

「え?な- ゴチン!- いったーい!」- ごろごろ-

痛いよ〜!柱に頭ぶつけちゃったー!

ーー料理ーー

「これは毎日(頭の中で)やってるから大丈夫よ!」

大丈夫!・・・よねえ?

「はい。それでは作業に入りましょう。」

「よし!汚名挽回するわよ!」

「・・・ええ、頑張って下さい(少し嫌な予感がしますね、警戒しときましょう)」

千夜に美味しいものを食べさせてあげるんだから！

～妹紅奮闘中・・・～

ーーハプニング続出ーー

「えっと・・・これ（砂糖）を入れればいいのね？」－ざらああ・・・－

「妹紅様！入れすぎです！」

え？じゃあ・・・

「塩を同じ量入れればいいのかな？」－ざあああ・・・－

「妹紅様ーー！？」

ー今まで料理をしたことだあるんでしょうか？ー

「ん～、なんかどろどろした変な黒い物体になっちゃったけど・・・ま、いっか♪」

ーそれはいわゆるダークマターー

～昼食～

「昼食もってきたわよ～」－トントン－

「おお、できたのか・・・な？・・・・・」－カチーン－

あら?固まったわ

「どうしたの?」

「それ・・・・もしかして妹紅が作ったのか?」

「ええ、そうよ。少し失敗してしまったけど食って感想を言ってくれると嬉しいわ／／／」-テレテレ-

「・・・・・(ヤバイやばいやばいー!なんか絶対に食べちゃ駄目な物体がーー!・・・でも妹紅を泣かすわけにはいかん。ここは我慢して・・・)い、いただきまーす」-パクッ-

「ど、そう?」-ドキドキ-

「・・・ふっ-バターン!-」

「千夜ーー!?」

やっぱりまだ体の調子が悪いんじゃない!しっかり大人しくしようとしないからよ!

ーいいえ、間違いなく千夜が倒れたのは暗黒物質(ダークマター)のせいですー

とりあえず千夜を布団の中に入れてっと-ずずず・・・ずずず・・・ばさっ-ふう、予想以上に千夜が重かったわ

「ふう~、あー、私も眠くなってきたわ・・・千夜と一緒に寝よっと」

それじゃお休みなさい♪

～家事終了～

「ふあ～、よくねた～」

あれ？せんやはまだねてるの～？

「んん～…ぐぐっ…っはぁ～、よし、しっかり起きたわよ」

それじゃまた翠にやることあるか聞きましょう

～翠捜索中・・・～

「あーいたいた！翠ー！なにかすることあるー？」

「あ、妹紅様。今日の家事は終わってしまったのでもうありません」

あちゃ～、ちょっと遅かったかしら？

「それじゃあ夕食を作りましょう♪」

よしっ、今度こそは失敗しないように作りるわよ！

「…ビクッ…・・・いいえ、あらかじめ作ってしまっていますので運ぶのを手伝ってもらえますか？」

「え～、まあしょうがないわね」

じゃあ明日作りましょう♪

「・・・（すみません千夜様、私には妹紅様を止められません）」

―こんな感じでもこたんの一日は終わりました。え？千夜？さあ？あえて言うなら次の日は男の悲鳴が町中に響いたってことですかね

―

もこたんな一日（後書き）

意見・感想を待ってます！

アンケート

ただ今少しだけ迷ってることがあります。それは竹取物語編が終わったらっぱっぱっと話を進めるかこのままゆっくり進めるかです。

まあ簡単に言ってしまうとこんな感じです

1、竹取物語編が終わったら適当な理由をつけて現代まで飛ばして幻想入り

2、何話か放浪編を書いてから幻想郷作りに関わり、古参妖怪にしたあとキンクリして原作の少し前からスタート

3、こんな感じの話を作って！や、○○（キャラの名前、オリキャラでも原作キャラでもいいです）を出して！など、つまりなんでもいいです

感想にどれがいいか書いて下さい。反応がなかった場合は作者のそのときの気分で決まります。

期限は竹取物語編が終わるまで

できたら協力して下さい、お願いします！ｍ（＿＿）ｍ

意見・感想も喜んで待ってま～す！

ようやく竹取物語の終わりがみえてきた・・・ｂｙ　作者（前書き）

駄文です。申し訳ございませんｍ（＿＿）ｍ

今回は少しセリフの前に名前を入れてみました

それでは本文をどうぞ！

ようやく竹取物語の終わりがみえてきた・・・ｂｙ　作者

キングクリムゾン！！

～あの竹取物語の一幕から3年ぐらい～

あ～、千夜だ。あの後何回か妹紅の料理を食う機会があったのだが・・・軽く死にかけた。それで三途の川らしきところに死神が居眠りしてたけど大丈夫かな？なんか怖い雰囲気のおっさんが後ろにいたんだが・・・・

ー確かこの頃はまだえーき様は地蔵のはずですー

「というか不死である俺がガチで死にそうになるって・・・」

ま、まあ気にしちゃいけないことだな

「さて、今日はどうしようか」

まだかぐやに月の使者がきてないしな。いったい何時くるんだろ？てっきりすぐくると思ってたんだが・・・

「おはようございます、千夜様。」ｰ ぺこりｰ

「・・・ああ、おはよう。とりあえず寝癖は直しとけ」

「・・・！！／／／」ｰ さっさっ！ｰ

ちなみにまだ藤原家に居候してる。理由は竹取物語が終わって妹紅が不死化したら戦闘訓練でもしてやろうかと思ったんだがな、まさかここまで時間がかかるとは思わなかったんだぜ

「そ、それでは朝飯を準備して待っております／／／」ｰ タッタッタ・・・ｰ

「わかった～」

長い間ここにいてわかったことは、翠は天然だってことと、どうやら俺は瀟洒なＰＡ○長になんか言える立場じゃなくなったってことだな（鼻から忠義心的な意味で）

「じゃあ妹紅を起こしに行きますか、」

実は前までずっと一緒に寝てたのに最近は寝なくなったんだよ。やっと自分が女だっていう自覚を持ったのかねえ・・・まあ俺が妹紅に『そろそろ自分の部屋で寝ろ』って言わなけりゃ今でも一緒に寝てそうだけどな。

「しっかし妹紅も女っぽくなってきたねえ」

少し前までは小っさくて可愛い女の子だったのに・・・

「っと、変なこと考えてるうちに妹紅の部屋についたな」

それじゃさっそ「ｰ ス～、ｰ あ～、せんやだ～♪ｰ ダキッｰ」・・・・・ふう

「ふっふっふ、そんな何回も俺がやられるわけがなぁっ！？ｰ プシ

ヤッ！-ぐふっ、例え俺を倒しても第二、第三の俺が・・・」

「-すー、すー、-」

「って聞いてないし」

これじゃあただの頭悪いやつの独り言じゃねえか

「お～い、起きろ～」-ゆさゆさ-

「・・・あえ?千夜がいる」

「さっからいたよ・・・」

別にいいんだけどな

「それより朝飯だ。食いに行くぞ」

「お～♪」

なんか妹紅の性格が原作と比べて丸くないか?

ー たぶん原作のもこたんはかぐやのせいで不比等が盗られ、そしてそれが理由で不比等になにかあったからああなったと、作者は思います。まあここのもこたんにそんな悲しいことはさせませんが・・・ｗー

「・・・とりあえず行こうか」

～青年移動中・・・～

「それでは～」

「「「「いただきます！」」」」

～食事～

「「「ご馳走様でした」」」

「お粗末様です」ｰ ぺこりｰ

よしっ、じゃあ日課の散歩に行こっと

「じゃあ行ってくるわ～」

「いってらっしゃ～い」

「ふむ、なら私はあの案件をまとめるとしよう」ｰ スタスタｰ

「それでは私は家事を．．．」ｰ スタスタｰ

「あ～！翠～、私も手伝う～！」ｰ タッタッタッｰ

よし、行くか

～青年散歩中・・・～

～商店街～

ーわかりにくいのでセリフの前に名前を書き入れましたー

八百屋「お～、千夜の坊主じゃねえか！これ買ってけ！」－どすん！－

「・・・おっちゃん、俺そんなに金持ってないって」

肉屋Ａ「おぉっ！千夜！この肉買え！」

肉屋Ｂ「なに言ってやがる！こっちの肉を買うに決まってんだろ！？」

肉屋Ａ、Ｂ「「んだと！やんのかてめえ！」」

「・・・だから金持ってねえって」

Ａ「おらあっ！」－シュキン！カキン！－Ｂ「はっ！」－シュン！シキン！－

人の話聞けよ・・・

家具屋「おお～坊主、この新製品を買わんかね？」

「じっちゃん、今金持ってきてないんだ。つか新製品なのに傷がついてるし・・・」

家具屋「ああ～、妻が少しぶつけてしまっただけじゃよ」

「さいですか・・・」

なんか俺もこの町に馴染んできたな～と思うよ

おばさんA「ね～、あの噂聞いた？」

おばさんB「あ～、帝様がかぐや姫に夢中になったっていうあの？」

おばさんC「あ～！私も聞いたことあるわ！」

おばさんD「本当、なんであんな小娘だけがいい思いしてるんでしょうね！」

おばさんE「妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい・・・」ぶつぶつ

おばさんF「ちょっと！Eが暴走してるわよ！」

増殖する黒いG「かさかさ」

おばさんH「それはしょうがないわね、Eは本気で帝様の玉の輿を狙ってたから」

おばさんI「本気だったん！？冗談だとおもってたわ～」

おばさんs「「「「あーっはっはっはーー！」」」」

・・・無視したほうがよさそうだな。色々と突っ込みたいとこがあんだが、じゃあ暇だしかぐやの家に行ってみるか

～青年移動中・・・～

「ついた・・・あれ？」

やけに重装備の警備隊がいるな、なにかあったのか？

「あの～、すみません」

警備員Ａ「なんでしょうか！」・ピシッ・

警備員Ｂ「ん～、あ？なに？仕事？しゃーねーなー、そこの坊主、なんか用か？残念だが中に入れることはできないぜ？」

片方はまさに警備員の鏡と言っていいくらいなのに、もう１人が憲兵っぽく見える・・・

「なにかあったんでしょうか？なにやら重装備なのですが・・・」

警備員Ａ「すみませんが、私にそれをお答えすることはできません」

警備員Ｂ「あ～、なんか月からくるみたいでよ、それで俺は雇われたんだよ」

あ、憲兵であってたっぽい

警備員Ａ「こらっ！勝手に喋ってはいけないだろう！」

警備員Ｂ「別にいいだろこんぐらい。契約書に事情を言ってはいけないなんて書いてなかったぜ？」

警備員Ａ「そこは人間の常識としてだな、そこのお家の事情を勝手に説明するなんて・・・」

警備員Ｂ「あーはいはい、とりあえずそこの坊主、今は色々と慌ただしいから見学はできないぜ。騒ぎが収まったらまたきな」

警備員Ａ「こらっ！まだ話は終わってないぞ！」

なんかめんどくさそうなことになってるな・・・ん？月からなんかくる？・・・つまりやっと竹取物語が終わるってことか？

「・・・何時くるかわかりますか」

警備員Ａ「・だからあなたは・・・」・くどくどくど・

警備員Ｂ「ん？ああ、どうやら次の満月にくるらしいぜ？坊主、覗きにくるのはいいが見つからないようにしろよ？警戒度がすごいからな、例え町の人だとわかっても見つかれば一時的に拘束されるだろうからな」

「忠告してくれてありがと。でも俺が侵入すること前提だな」

まあ最初から侵入するつもりだったけどね。せっかくの竹取物語の終幕なんだから見なきゃ損だろ！

警備員Ｂ「ああ、お前の目を見てなんとなくそんな感じがしただけさ」

「そう、じゃあまたくるよ。見つからないように、だけどね」

警備員Ｂ「おう、もう会うことはないと思うがまたな」

じゃあ今日のところは家に戻りますか

～藤原家～

「ただいま～」

「お帰りなさいませ」- ぺこり-

「お～か～え～り～」- だら～～-

「・・・翠、なんで妹紅はだらけきってんだ?」

でもこれはこれで・・・

「今日の妹紅様はとても頑張っておりました。目立つ失敗もなく、家事のほとんどを妹紅様がやってしまわれたので私の仕事がなくなってしまいましたが」

「あ～う～、翠っていつも大変なことしてるんだなって身に染みたわ」

「そうか、いい勉強になったんじゃないか?」- なでなで-

「えへへへへ／／／」- ほにゃっ-

「・・・・・（羨ましい羨ましい羨ま（ｒｙ）」

・・・ろっと、また鼻血が出るとこだったぜ

「・・・お夕食の準備をして待っております」- スタスタ-

「おや？なんか翠が不機嫌っぽくなかったか？」

なんか怒らせたかな？

「・・・千夜、後で翠も撫でてあげて？」

「ん？なんでだ？」

「翠はいつも頑張ってるから褒めてほしかったのよ（さすがになにも無いのは可哀想だわ。翠も自分から甘えることができるようになればいいのだけど・・・）」

そうだったのか・・・

「わかった、後で翠を撫でるとしよう」

「それがいいわ」

じゃあ飯を食いに行きますか

～食事～

「「「いただきます！」」」

「・・・いただきます」

ありゃりゃ、翠に元気がないね

～食事終了～

「「ご馳走様でした」」

「・・・お粗末様でした」-かちゃ・・・かちゃ・・・-

ん～、そうだな

「翠ーー！」

「・・・なんでしょうか、千夜様」

うっ、心なしかいつもより他人行儀だ

「こっちきて～」

「・・・？はい」

「よしっ」-なでなで-

「ふえっ／／／」-ぽふん-

おおー、顔が一瞬で真っ赤になったな

「いつも頑張ってくれてありがとな。」-なでなで-

「・・・ふえ～～／／／」-ぷしゅ～-

あやや、また気絶しちまったか

「・・・相変わらず翠は初心ね～」-ニヤニヤ-

「そうだな、翠ももう少し積極的に千夜に迫ることができればいいのだが・・・」

「・・・妹紅、不比等、見てたのか？」

まったく気がつかなかった

「そりゃ～ね～、食事が終わった後すぐにするとは思わなかったわよ。てっきり後で自室に翠を呼び出してこっそりするのかと・・・」

「そしてそのまま翠を押し倒して・・・ということだな」

「きゃ～～♪」

「やるな、千夜」

・・・もうやだこの親子

「もう寝る」－ぷいっ－

「千夜が拗ねてしまったな。少し弄りすぎたか・・・」

「あ～ん、ごめんなさ～い」－だきっ－

「・・・まあしょうがない、妹紅は許してやろう。ただし不比等、てめえは駄目だ！」－ビシッ！－

「なんでだ！？・・・私も抱きつけばいいのか？」

「やめろっ！」

気持ち悪いわ！

「・・・もういいや、本当に寝る」

「あらそう？お休みなさ～い♪」

「お休み」

さて、寝るか

ようやく竹取物語の終わりがみえてきた．．．ｂｙ　作者（後書き）

なにか問題があれば感想まで！

妹紅が・・・・・グレた・・・・（前書き）

楽しみにしてる人がいるかわかりませんが投稿！

ではどうぞ！

妹紅が・・・・グレた・・・

「なによあんた!千夜は私の大事な人なのよ!（好きな人的な意味で）」-ぐいっ-

「何を言ってんのよこの小娘!私はあんたが知らない千夜のあんなことやそんなことを知ってるのよ!それに私のほうが千夜を大事に思ってるんだから!（遊び相手という意味で）」-ぐいっ-

ういっす、千夜だ。なんか妹紅とかぐやが俺を両端引っ張りあってるんだが・・・俺は綱引きの綱じゃねえんだぞ!二人とも結構本気で引っ張ってるから腕が痛えんだよ!

「にしてもこんなことになるとはな・・・」

あんなところで好奇心をださなきゃよかったな。それじゃ久しぶりに回想オン!

~回想~

「あ~暇だ~」

何時に月の使者がくるかはわかったが満月までまだ時間が結構あるからな

「じゃあ散歩行ってくるわ~」

何もすることがねえし商店街にでも行くか

「・・・行ってらっしゃーい」

あれ?なんか気のない返事がきたな・・・・ま、いっか♪

～妹紅視点～

「・・・行ってらっしゃーい」

そういえば千夜っていつも散歩に行ってるけどどこに行ってるんだろう?少し気になるわね・・・

ー千夜はいつも行き先（商店街）を伝えていません。いちいち伝える必要も無いだろう。と考えているからですー

「・・・よしっ!「妹紅様?」ひゃわっ!」-ビクン!-

「今日は家事をなさりませんのですか?」

「驚かさないでよ翠!・・・ええ、今日は家事をしないわ」

「申し訳ございません-ぺこり-ずっと呼びかけておりましたが返答がありませんでしたので」

「・・・ちょっと考え事をしてたのよ」

「了解いたしました。それでは失礼します」-スタスタ-

よし!千夜を追いかけよっと

～少女追跡中・・・～

やっと千夜を見つけたわ。・・・行くところって商店街だったのね、もしも女と逢引だったならどんな手を使ってもぐちゃぐちゃにしてその女と別れさせようと思ってたのに（黒笑）

「それにしても商店街だったか～、これじゃつまらないから家に帰ろうかしら？」

きた意味がないわね・・・どうしようかしら？

「やっぱり帰るしか・・・あれ？千夜が商店街から出ようとしてる。でもそっちの方向はうちじゃないし・・・・・もしかして！！」

向かってる方向にはあいつの家が！！

～少女尾行中・・・～

やっぱりかぐや姫の家だったのね・・・さて、家に帰ったら尋問しようかしら？（黒笑）

「' ブルッ！' （なんか嫌な予感が・・・）」

でもここにきてどうすんだろ？中に入れるわけでもないのに・・・

「ん？あの女は・・・」

女の私から見ても綺麗な顔、なんか神秘的な雰囲気・・・？、神秘的というかなんというか・・・

ーたぶん穢れがないから神秘的に見えるんだと思いますー

「まあいいわ、たぶんあれがかぐや姫でしょう」

例えお父様が盗られても千夜は絶対に渡さないわよ！

～千夜視点～

・・・驚いた、まさか様子を見にかぐやの家にきたらかぐやに遭遇するとは

「お前こんなとこに居ていいのか？」

「・・・久しぶりに再開した女に言う言葉じゃないわね」

「大丈夫だ。お前を異性として見てないからな」

「それどういう意味よ！」

だって・・・なあ？

「俺お転婆姫ってあんま好きじゃないんだ。めんどくさいし」

「なによそれ！性格なんだからしょうがないでしょ！」

俺は淑やかな女性がタイプなんだよ。（妹紅は妹みたいなもんだから別）

「まあいいわ。暇だから私の話し相手になりなさい」・ぐいっ・

・・・まあ暇だしいっか「待ちなさい！千夜をどこに連れて行く気

よ！」あれ？妹紅？

「なによあんた、千夜は私の物なんだから私がなにしようが勝手でしょ」・ぐいっ、スタスタ・

いやお前の物じゃねえよ

「駄目っ！千夜は私の物なんだから！」・ガシッ・

いいや俺は誰の物でもねえよ。しいて言うなら俺は俺の物だ

「「んぎぎぎぎ！」」・ぐぐぐぐ・・・・

ー引っ張り合い中ー

あー、腕が折れ・バキッ・あ、折れた

～回想終了～

「・・・だーー！」・バッ・

「キャアッ」・バサッ・

「あら？」・ひょいっ・

さすがに我慢の限界だわ！でも見事に妹紅は避けたな

「なにすんのよ千夜！怪我するとこじゃない！」

「はん！軟弱なお姫様ね！」

「なによーー！」

「否定できないでしょ！」ー アーッハッハッハー！ー

「喧嘩すんなよ．．．」

めんどくせえな

「いい加減に静かにしろ」ー ゴチン！ー

「痛いっ！」ー ゴロゴロー

「う～～」ー プルプルー

おおー、お姫様と一般人（貴族だけどね）の差が出たな。かぐやは痛さに我慢できなくて地面を転がり回ってんのに妹紅は我慢してうめいてる

「なのすんのよ！痛いじゃない！」ー ブンブンー

「．．．ごめんなさい千夜」ー しゅんー

「妹紅は素直だな～ー なでなでー それに比べてかぐやは．．．ーちらっー．．．はぁ」

「なによ！言いたいことがあるんならはっきり言いなさいよ！」

お？いいのか？

「じゃあまず、なんでお前はそんなに我儘なんだ！そもそもお姫様と言うのはな、淑やかで物静かで上品な・・・」

～中略～

「・・・それでな、その世話してやった奴に子供ができてな、その時は人生最高！みたいな顔してたのに嫁さんが事故にあってからガラリと人が変わっちまってな」

「へ～」

あれ？なんの話してたんだっけ？

「－そろ～－」

「そこで脱出しようとしてる馬鹿ぐやは待て」－ガシッ－

「！？離しなさい！」－ジタバタ－

「今逃げようとしただろ？」

まったく、油断も隙もない

「だってあきらかに関係ない話になってるんだもの！」

「・・・そうか？」

「・・・そうだったかしら？」

「あんた達絶対おかしい！」

なにを言う、このどこからどう見ても常識人である俺に

「おかしいってよ妹紅」

「おかしいかしら？千夜」

「俺はおかしいと思わない。ということで多数決的にかぐやがおかしい」－ビシッ－

「なによそれ！どうしようもないじゃない！」

そこらへんは・・・なあ？

「気合であんがいどうにかなるもんだぞ？」

「できるわけないでしょ！？」

「あら？お姫様はそれくらいもできないのかしら？」－プププ－

「・・・－ブチン－ゴラァー！そこの小娘！あんまり調子にのってると消滅させるわよ！」

怖っ！なにするつもりだよ！

「何言ってんの？そんなことできるわけナイじゃない。お姫様は馬鹿なの？死ぬの？」

妹紅も怖っ！なんでこんなにかぐやが嫌いなんだよ！

「（こんななんの役にも立たないような女に千夜を渡すもんですか！私が千夜を諦めらめるのは千夜に嫌われた時と、私以外の誰かを選んだ時よ！・・・まあ一夫多妻っていうのもありかもしれないわね。少し考えときましょう）」

「・・・アハハハハ・・・・ブッコロス！」

かぐやが壊れた！どうしよう？」おろおろ」

「永遠と須臾の狭間に消え去りなさい・・・！」」ゴオオオ！」

一豆知識：須臾（しゅゆ）というのは極めて短い時間のこと。つまりＰＡＤ○と同じで時を操るタイプの能力。だが発揮されることはあまりない―

ちょっ！？能力まで使うのかよ！

「死ね「止めろって！」しゅぽん」」・・・！」ガパゴパ」」

ふう、止まったか。今やったのは水の玉を発射したんだ。この水の玉は相手の頭に当たったらその頭を覆って窒息死させる技なんだよ。まあ水棲の生き物にはきかないんだけどな

「・・・！（落ち着いたから早くこの水を解きなさい！）」」ゴボボボボ」

「おっと」」ぱしゃん」

「ウーゲホッゲホッ！・・はぁー、はぁー、危うく死ぬとこだっ

たじゃない！」

「お前は死なないから大丈夫だろ？」

「肉体的に死ななくても精神的に死んだら意味ないのよ！」

「そうか」

どーでもいーな

「・・・ふう、私も落ち着いたわ」

「妹紅もだいぶ荒れてたな」

「えぇ・・・少し許せないことがあったのよ（どうやらかぐや姫は千夜のことが好きってわけではなさそうね。でも油断はできないわ）」

そんなに不比等が盗られたのが許せなかったのか？

ーちょっと違いますー

「とりあえず落ち着いたな？二人とも」・なでなで・

「うん！落ち着いた！だからもっと撫でて／／／」

「なに勝手に撫でてんのよ／／／！（ちょっとドキってしちゃったじゃない／／／）」・バッ・

ーピコーン、ぐーやフラグが立ちました。しかしこのフラグはあま

り好感度を上げすぎるとヤンデレフラグ（永遠の時を一生一緒に生きる）に変わりますのでご注意して下さいー

「おっと- ひょいっ- 別に振り払わなくてもいいだろ」

まったく、このお姫様はなんでこんなに暴力的なのかねえ

「まったくもう／／／- すー、はぁー- ふう、女性の頭は気安く触っていいものじゃないわよ」

「おや？かぐやがまともなこと言ってる。まあ正論だから素直に謝ろう。正直すまんかった」- ぺこり-

「・・・なんか謝られたはずなのに馬鹿にされてるような気がするわ」

それは気のせいじゃないな

「まあそんなことより話を戻そう」

「・・・？」- こてん-

いや妹紅、首をかしげられても・・・可愛いけどさ

「早くそうしなさいよ・・・」- はぁ-

「まあ元の話つってもお前が暇つぶし相手になれって言ったことだけどな」

途中から妹紅が乱入してきて話がわけわからない方向に行っちゃっ

たけど

「そうだったわね・・・でももういいわ。なんか疲れちゃった」-
はぁ-

「あまりため息をつくと幸せが逃げるぞ?」

「え?そうなの?私あまりため息ついてないから幸せは逃げてないのかしら?(もしかしてため息ついちゃうと今の幸せがなくなっちゃうのかな?・・・絶対ため息なんかつかないもんね!)」

ー妹紅絶賛勘違い中ー

「うっさい!余計なお世話よ!」

ん~そろそろ暗くなってきたな・・・

「じゃあ俺は帰るわ。じゃあなー」

「帰るの?なら私も一緒に帰るー♪」-ギュッ-

「おっと-ぽふん-あまり抱きつくなよ?町の人に勘違いされるぞ?」

「えへへ~、私はそれでまったく構わないわ♪(むしろそれが狙いだし・・・ね?-ニヤリ-)」

「ん、そうか。じゃあ帰ろう」-スタスタ-

「お~♪」-スタスタ-

「・・・（え?なにこの疎外感）はぁ、帰ろう」-とぼとぼ-

よし、家に帰って寝よう

妹紅が・・・・・グレた・・・（後書き）

また次回も見てくれると嬉しいかな！

感想・意見・ご要望をお待ちしてます！

竹取物語の終わりの前日・・・？（前書き）

作者は遊戯王が結構好きです

でもタクティクスはじょーのーち君レベル（Ｔ＾Ｔ）

竹取物語の終わりの前日・・・？

～数週間後～

やあ、千夜だよ。ついに明日月の使者がくるんだ。確か東方だと月の使者にまじって永琳もくるんだっけ？久しぶりに会うな・・・変わってなけりゃいいんだが・・・

「他の話はー？」

「早く話なさい！」－ヒュン－

「おっと」－パシッ－

今は妹紅とかぐやが一緒に俺の旅の話を聞いてるんだが・・・何時の間に仲良くなってんだ？

「（まあ気に入らないけど・・・別に嫌いってわけじゃないしね）」

「（かぐや姫の千夜を見る目がちょっとだけ変わった・・・私の勘がかぐや姫を警戒しろって告げてる）」

仲良きことは美しき哉・・・かな？

ー実際は仲いいわけじゃありませんけどねー

「あ、そうそう千夜」

「なんだかぐや？」

「明日月の使者がくるからなんとかして」

「-ぶほっ！-いきなりだなおい！」

いきなりすぎて妹紅なんか口をポカ～ンって感じで開けてるし・・・

はしたないから口を閉じなさい

「そもそも一般人の俺になにをしろと？」

「・・・はっ！一般人（笑）」

失礼だな！

「そもそも人じゃ無いじゃない」

「いやそうだけどよ・・・」

あ、ここに妹紅居るの忘れてた

「・・・ふ～ん、千夜って人じゃなかったんだ～」-ゴゴゴゴゴ・・・！-

「ああ，そうだ・・・・よ？・・・・」

あれ？妹紅の後ろに般若が・・・

「・・・なんで」-ぼそっ-

「ん？なに？」

「・・・なんで教えてくれなかったのよーー！」・ウガーー！・

うおっ！？ビビるんならわかるけどなんでキレてんだよ！

「（千夜は人じゃない！？・・・つまり子供ができないってこと！？それは困るわ！・・・それは今は置いといて確認しなきゃいけないことがあるわね・・・）千夜？」

「なんだ？」

「・・・千夜は妖怪なのかしら？」

「そうだが・・・」

やっぱり身近な人間が妖怪だったことにショックを受けてんのかな？

「・・・妖怪って人を襲わないと生きられないのよね？」

「・・・？そうだけど」

俺は特別だが

「・・・じゃあ今すぐ人を襲ってきなさい！」

「・・・ええーー！」

どんな超解釈したらそうなった！？

「（妖怪ってことは人を襲わないと生きられないってことは・・・

千夜はこの町にきてから人を襲ってないはずだし・・・このまま放って置いたら千夜が消えちゃう！）」

ーやっぱり妹紅にとっては千夜が妖怪だろうが人間だろうが関係ないみたいですー

「いやいや！別に人を襲わなくても大丈夫だから！」

「・・・そうなの？」

「ああ、俺は少し特別でな。一回も人を襲ったことはないが消えそうになったりしたことはないぞ？」

「・・・よかった～」'はぁ～'

あらら、心配かけちゃった

「・・・ゲフン！、もういいかしら？」

「ああ、かぐやいたのか？」

「・・・ねえ？なんか私の扱い酷くない？」

「酷くない酷くない」

酷くない・・・よな？

「それで、月の使者はどうにかしてくれるのかしら？」

「その前にまず聞かせてくれ」

「なに？」

「・・・お前は月に帰りたくないのか？」

都市は地上に比べてだいぶ住みやすいはずだ。暇つぶしの道具も大量にあるはずだし・・・なのになんで不便な地上に残ろうとしてんだ？

「嫌よあんなとこ！」‐ふん！‐

「なんでだ？」

「変化も！事故も！暇も！果てはやることすらない！これほどつまらないことがありますか！いや、無いわ！」‐ど～ん‐

反語！？

「それでも暇つぶしする方法はいくらでもあるだろうよ」

「それでも、よ」

そんなもんかねえ？

「・・・へ～、かぐや姫って本当に月の民だったんだ～」

「信じてなかったのか？」

「うん。だって月って言ったら空に浮かんでるあれでしょ？あそこに人が住んでるなんて誰も信じないわよ。だから私はただしつこい

求婚に嫌気がさしてどっかに逃げる口実だと思ってたわ」

なるほど、かぐやならありえる

「違うわよ。確かにあの貴族達の求婚は面倒臭かったし今も帝の求婚がうざったいけど、でも人に好かれるのは嫌いではないしね・・・」

「俺には理解できんな」

「私も（私は千夜がいてくれればそれでいいしね）」

「そう？」

まあ性格の違いだろ

「で？」

「そうだな、別にいいぞ」

原作がどう変わるかわからんが・・・とっくの昔に関わってんだから別にいいどろうだろう？

「そ、なら明日の夜にくるから準備しといて」

「都市製の兵器が出てくるんだろう？それはどうすんだ？」

「それは昨日瑛永琳から通信がきたのよ。『機械は私がどうにかするわ』だって」

そうか。まあ永琳なら心配ないだろ

「あ、そうそう。昨日通信したときに千夜がいるってこと話たら喜んでたわよ?『会いに行くから・・・どっかいっタらダメヨ?』だって。・・・ちょっと雰囲気が怖かったわ」

'ブルッ' あ～、ちょっっと嫌な予感がするな～

～そのころ月～

永琳「・・・うふふフフフ」

月の使者A「('ひそひそ' おい!なんか八意様が怖いぞ!)」

月の使者B「(ああ、あれは怖い)」

月の使者C「(いえ、あれは・・・恋する乙女の顔ね・・・!)」

月の使者B「(マジで!?)」

月の使者A「(・・・なんでそんなことがわかるんだよ)」

月の使者C「(乙女の勘よ!)」

A・B「「(((いやお前男じゃん)))」」

C(男)「(うっさいわよ!」

A「（あ、馬鹿！大きな声だすなって！）」

永琳「（千夜千夜千夜千夜千夜千（ｒｙ）・・・うふふフフフ」

B「（・・・気付いてなかったようだな。助かった）」－はぁ～－

C「（・・・危なかったわ、気付かれてたら前に永琳様を警護していたときに永琳様の考え事を邪魔して実験台にされたいい男－ジュルリ－と同じ運命をたどるとこだったわ・・・それはそれでいいかも）」

A「（ああ、ありゃ酷かったな。月で一番かっこいいと言われたやつだったのにその顔が・・・）」－ガタガタガタ！－

B「（ああ、そうだな。そしてCよ、それ以上こっちに近づいてくるな！）」

C「（いいじゃない別に）」－にじり・・・にじり・・・－

B「（くんな！）」－ダッ！－

C「待ちなさい！」－ダッ！－

A「おい馬鹿！」

永琳「・・・今日の実験台は三人カシラ？」

A・B・C「「「ひ～～！」」」

―A・B・Cは現実（リアル）からログアウトしますた―

～地上～

・・・なんか変態が大変なことになってる気がする

「そうか・・・」

「まあ永琳はあなたのことを嫌ってるわけじゃないんだからなんとかなるでしょ」

「だといいんだけどね～」

「・・・せーんや♪」-ニコニコ-

「なんだ妹紅？」

やっけにニコニコしてんな

「永琳って誰かしら？」-ニッコニッコ-

「俺が昔お世話になった女性だ（むしろ世話してやったやつかな？）」

例えば実験の後片付けやったり料理作ってやったり部屋の片付けやったり朝起こしてやったり気付いたら台の上に寝そべってたり・・・

あれ？

「あんまりいい思い出がねえぞ・・・？」

「そうなの？（じゃあまだ大丈夫かしら？・・・いえ、十中八九そ

の女性は千夜が好きね）」

「しかし、それなら俺が行く意味が無いんじゃないか？」

戦いぐらいしかできんぞ？

「ええ、無いわ」‐キッパリ‐

「・・・そうか」

「でもあなたは月の民に対しての牽制になるのよ」

「どういうことだ？」

よくわからん・・・

「あなたは月では有名妖怪だからよ」

「・・・なんでだ？」

「第一次妖怪大戦、別名”最終戦争”で千夜にあだ名がついたのよ。”抹殺の使徒”・”開闢の使者”・”終焉の使者”その他・・・つまり千夜はそれだけ月にとって脅威なのよ。（実際噂では”全てを破壊しつくした破壊の化身”と言われて、永琳の話では‐都市の事情に巻き込まれた哀れな妖怪‐って言ってたし、実際に会ってみると永琳の話が合ってそうだわ）」

俺はカオス・ソルジャーでも混沌帝龍でもないっつの！

―かぐやは知らない話だが、‐破壊の化身‐と言ってるのは千夜の

ことを嫌っていた一部だけで、商店街など千夜と関わりがあったとこでは‐都市のために戦ってくれた英雄‐となっている―

「だから月の使者は全員殺さず、無傷のまま月に送り返してあげて？」

「ん？殺さなくていいのか？」

もう始めて人を殺す覚悟はできてたんだが・・・

―千夜は今まで１０分の９殺しや、人に限りなく近い形の妖怪（鬼）を殺したことはあるが純粋な人間を殺したことはない―

「ええ、なぜか月の使者は皆やる気が無いみたいなのよ。だから適当に言い訳ができればなにもしないで帰るわ。そう、例えば相手に最凶の妖怪がいた、とかね？」

なるほど・・・

「さっぱりわからん！」

「なに堂々と言い切ってんのよ！」‐スパーン！‐

「痛っ！」

刀の峰で叩くなって！

「・・・千夜？単語の意味がわからない私でも理解できたんだからそれはどうかと思うわよ？」

・・・ぐふっ！

―妹紅に非難された！千夜は精神的に９９９９（カンスト）のダメージ！―

「だからようするにね・・・」

～たったそれだけの説明に２時間～

「・・・ｏｋ、把握」

「・・・本当？」

「大丈夫だ、問題無い。・・・はず」

「（・・・本当に大丈夫かしら？）」

「じゃあ理解できてなかったら一つ言うこと聞いてもらうからね！」

「・・・いや、かぐやがそれを言うならわかるけどなんで妹紅なんだよ」

妹紅はかぐやが説明してんのを横で見てただけだろ？

「駄目！絶対言うこと聞いてもらうんだから！（できれば千夜からシテもらいたかったけど・・・そんなに悠長なこと言ってられない状況になってきてるし、このまま私の部屋に連れ込んで・・・／／／）」

「あら？なら私も聞いてもらおうかしら？」－ニヤリ－

なんか妹紅からはピンク色のオーラがでてるし、かぐやにいたっては完全にイタズラするつもりだな

「それじゃあ明日の夕方ぐらいまでに私の家にきてね」

「わかった、今日はもう帰って寝ようか。お休みなかぐや」

「お休み～、かぐや姫」

「ええ、お休みなさい二人とも」

じゃ、帰ろっか

竹取物語の終わりの前日・・・？（後書き）

まあ竹取物語が終わっても竹取物語編はまだ終わりませんけどね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2543y/

東方洪水域

2011年12月9日02時42分発行